



# 2025 韓日交流 作文 コンテスト

## 作品集

### 応募部門 6部門

#### エッセイ

日本語エッセイ 中高生部門  
韓国語エッセイ 中高生部門  
日本語エッセイ 一般部門  
韓国語エッセイ 一般部門

#### 川柳・俳句

日本語川柳・俳句部門  
韓国語川柳・俳句部門

〔主催〕 駐日本国大韓民国大使館 韓国文化院、東京韓国教育院

〔共催〕 駐大阪大韓民国総領事館 韓国文化院 〔協力〕 韓国観光公社、韓国コンテンツ振興院、韓国農水産食品流通公社

2025  
韓日交流  
作文  
コンテスト

作品集



〔主催〕 駐日本国大韓民国大使館 韓国文化院、東京韓国教育院

〔共催〕 駐大阪大韓民国総領事館 韓国文化院 〔協力〕 韓国観光公社、韓国コンテンツ振興院、韓国農水産食品流通公社

## INDEX

実施概要	4
審査結果	6
審査評	9

## 受賞作品

日本語エッセイ中高生部門	16
日本語エッセイ一般部門	23
韓国語エッセイ中高生部門	30
韓国語エッセイ一般部門	37
日本語川柳・俳句部門	44
韓国語川柳・俳句部門	46





# 2025 韓日交流 作文 コンテスト

한일교류 작문 콘테스트  
皆さんの想いを伝えてみませんか

未来世を担う両国の子供から一般の方まで幅広い方々を対象に、  
互いへの想いを伝え合い、新しい「絆」作りのためのエッセイ、川柳・俳句を募集します。  
日韓往復旅行券など、ステキな賞品を揃えて皆さんのご応募をお待ちしています！

**応募部門  
6部門**

**エッセイ**

日本語エッセイ 中高生部門  
韓国語エッセイ 中高生部門  
日本語エッセイ 一般部門  
韓国語エッセイ 一般部門

**川柳・俳句**

小学生から一般の方まで対象

日本語川柳・俳句部門  
韓国語川柳・俳句部門

**応募締切**

2025年  
8月18日 [月] 必着  
(メールの方は同日24時まで)  
※応募は随時受け付けます。

**発表**

2025年  
9月5日 [金]  
韓国文化院ホームページにて発表  
※結果の個別発送は行いませんので  
予めご了承ください。

[www.koreanculture.jp](http://www.koreanculture.jp)

**賞 (予定)**

最優秀賞 (各部門 1名、計 6名)  
賞状、旅行券 (日韓往復旅行券 1名付)

優秀賞 (各部門 2名、計 12名)  
賞状、旅行券 (SARAJEVO) フルーツバスケット (1名付)

佳作 (各部門 4名、計 24名)  
賞状、旅行券 (1名付)

入選 (各部門 12名、計 72名)  
賞状、旅行券 (韓国語学習書)

**受賞作品展示会 (予定)**

2025年  
10月1日 [水] ~ 10月14日 [火]  
駐日韓国大使館 韓国文化院にて

※応募資格、申込書、制作の品名を明記し、届いた時点で、作品名、賞状、旅行券を郵送します。  
※応募資格、申込書は個人で提出し、応募者本人のみに限り、他のコンテスト等への応募も可能です。  
※賞品は抽選にて決定し、抽選結果は抽選結果通知書、入賞通知書、賞品目録、コンテストの開催、表彰および受賞者からの感謝状等によりお知らせいたします。抽選結果は抽選結果通知書にてお知らせいたします。入賞通知書、賞品目録、抽選結果通知書に添付する作品名には賞品の品名が記載され、抽選結果は抽選結果通知書にてお知らせいたします。

(主催) 駐日本国大韓民国大使館 韓国文化院、東京韓国教育院 (共催) 駐大阪大韓民国総領事館 韓国文化院 (協力) 韓国観光公社、韓国コンテンツ振興院、韓国農水産食品流通公社

●お問い合わせ 03-3357-5970 (平日 10~17 時) [contest@koreanculture.jp](mailto:contest@koreanculture.jp)

コンテストポスター





## 実施概要

### 事業名

# 韓日交流 作文コンテスト2025

～ 皆さんの想いを伝えてみませんか～

#### 【日程】

- 作品募集：2025年4月21日（月）～8月18日（月）
- 審査（1～3次）：2025年8月19日（火）～9月4日（木）
  - 審査結果発表：2025年9月5日（金）
- 受賞作品展示：2025年10月1日（水）～10月14日（火）

#### 【趣旨】

未来世代を担う両国の子供から一般の方まで幅広い方々を対象に、互いへの想いを伝え合い、新しい「絆」作りのためのエッセイ、川柳・俳句を募集し、表彰する。

#### 【募集部門】 全6部門

##### <エッセイ>

日本語エッセイ 中高生部門：中学生から高校生までが対象

韓国語エッセイ 中高生部門：中学生から高校生までが対象

日本語エッセイ 一般部門：一般の方が対象

韓国語エッセイ 一般部門：一般の方が対象

##### <川柳・俳句>

日本語川柳・俳句部門：小学生から一般の方まで対象

韓国語川柳・俳句部門：小学生から一般の方まで対象



## 【応募規定】

### <日本語エッセイ（中高生・一般）部門、韓国語エッセイ（中高生・一般）部門>

#### ◆ テーマ（次の中から択一）

- A 韓国文化コンテンツ（ex. 韓服、韓国語、K-POP、ドラマ、映画、ゲームなど）
- B 韓日国交正常化 60 周年（ex. 韓日の未来など）
- C 韓国観光（例：私の 00 旅行記、おすすめ旅行地など）
- D 韓国料理（例：キムチ、ビビンバ、トッポギなど）
- E 韓日交流（例：私が考える韓日交流）

### <日本語川柳・俳句、韓国語川柳・俳句部門>

#### ◆ テーマ

自由（但し、日本語川柳・俳句部門の場合、韓国または韓国語に関するもの）

## 【審査方法】

駐日韓国大使館 韓国文化院内で部門ごとに審査委員が集まり、審査会を開催

## 【審査員】

#### ◆ 総評

呉英元〔二松学舎大学名誉教授・駐日韓国文化院 世宗学堂長〕

#### ◆ 日本語エッセイ（中高生・一般）部門

桜井泉〔ジャーナリスト、元朝日新聞記者〕

深沢潮〔小説家〕

#### ◆ 韓国語エッセイ（中高生・一般）部門

李允希〔元東京成徳大学教授〕

南潤珍〔東京外国語大学教授〕

武井一〔東京都立日比谷高等学校教員〕

#### ◆ 日本語川柳・俳句部門

兼若逸之〔元東京女子大学教授〕

#### ◆ 韓国語川柳・俳句部門

チョ・ヒ Chol〔日本薬科大学 客員教授、元東海大学教授〕





# 審査結果

(総応募作数：4,455 作)

## 日本語エッセイ 中高生部門 (応募作数：187 作)

### 最優秀賞 (1名)

蒲原 詩織 (作新学院高等学校)

### 優秀賞 (2名)

石原 優衣香 (山梨英和高等学校)

小林 泰勳 (聖光学院中学校)

### 佳作 (4名)

光岡 優希 (さいたま市立大宮国際中等教育学校)

笠松 こすも (板橋区立第五中学校)

牧 心音 (上宮高等学校)

渡邊 菜々 (法政大学国際高等学校)

### 入選 (12名)

赤城 雄大 (立教池袋高等学校)

中島 広晴 (東洋大学京北高等学校)

亀山 紗来 (広尾学園高等学校)

朴 書庭 (建国高等学校)

加藤 里桜 (Clear Lake High School)

千田 立煌 (青森私立山田高等学校)

瀬濤 梨里花 (大阪教育大学附属池田中学校)

橘 葵衣 (金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校)

張替 健世 (東洋大学附属牛久高等学校)

弘松 詩菜 (愛媛大学教育学部附属中学校)

牛嶋 恭子 (鶯谷中学校)

木下 知優 (親和女子高等学校)

## 日本語エッセイ 一般部門 (応募作数：222 作)

### 最優秀賞 (1名)

水島 諭子 (大阪府)

### 優秀賞 (2名)

福田 美香子 (創価大学)

浅野 まな (国際基督教大学)

### 佳作 (4名)

田原 彰人 (埼玉県)

小林 拓馬 (広島大学)

松田 陽希 (帝塚山学院大学)

イ ヒョンチョル (大阪公立大学)

### 入選 (12名)

合田 敦紀 (東京科学大学)

木村 悦子 (広島県)

服部 大芽 (東京都)

桑原 結愛 (東海大学)

井戸川 行人 (東京都)

水口 さか (神奈川県)

森 ゆうた (東京都)

武藤 朋 (東京都)

洪 藍 (埼玉県)

松本 彩 (神奈川県)

大村 純平 (帝塚山学院大学)

原 若菜 (三重県)



## 韓国語 エッセイ 中高生部門 (応募作数：107 作)

### 最優秀賞 (1 名)

李 昭始 (建国中学校)

### 優秀賞 (2 名)

中谷 唯梨 (神奈川県立横浜国際高等学校)

杉田 和奏 (湘南白百合学園高等学校)

### 佳作 (4 名)

山田 理琴 (大阪学芸高等学校)

矢島 美優 (宮城県泉高等学校)

佐藤 幸 (Maple Leaf Kingsley International School)

関口 遙 (松戸国際高等学校)

### 入選 (12 名)

小田垣 莉子 (滋賀県立国際情報高等学校)

金 美玖 (京都国際中学校)

本城 花奈 (福岡県立博多青松高等学校)

豊泉 理紗 (八洲学園大学国際高等学校)

稲垣 郁菜 (京都国際高等学校)

合田 彩恵子 (東京都立杉並総合高等学校)

池田 凜 (神奈川県立横浜国際高等学校)

中野 心瑚 (広島女学院高等学校)

福島 和夏 (日本女子大附属高等学校)

木村 佳蓮 (田園調布雙葉高等学校)

沖原 まどか (横浜雙葉高等学校)

森 のはな (関東国際高等学校)

## 韓国語 エッセイ 一般部門 (応募作数：225 作)

### 最優秀賞 (1 名)

水山 葵 (中央大学)

### 優秀賞 (2 名)

森元 富美子 (千葉県)

田村 香織 (大阪府)

### 佳作 (4 名)

蓮見 琳 (新潟大学)

田原 彰人 (埼玉県)

山梨 彰子 (東京都)

田中 菜乃 (帝塚山学院大学)

### 入選 (12 名)

大江 千晴 (東京都)

沖津 里花 (北海商科大学)

竹田 優 (新潟大学)

志村 淑江 (千葉県)

野田 安里 (静岡文化芸術大学)

青木 直子 (静岡県)

永田 詩央里 (帝塚山学院大学)

佐々木 秀一 (東京都)

白井 清佳 (大手前大学)

溝尻 夏未 (京都府)

金 魯煥 (東京都)

鈴木 颯真 (日本外国語専門学校)

## 日本語川柳・俳句部門 (応募作数：2,595 作)

### 最優秀賞 (1 名)

藤本 かおり (京都府)

### 優秀賞 (2 名)

栗生 将信 (神奈川県)

大宮 莉桜 (新潟大学)

### 佳作 (4 名)

佐藤 泰成 (東京大学)

吉原 百花 (法政大学国際高等学校)

西村 空 (北海商科大学)

朴 喜俊 (新田小学校)

### 入選 (12 名)

荒科 悠子 (埼玉県)

信岡 太陽 (広島県)

上原 夕輝 (立教池袋高等学校)

小坂 武弘 (京都府)

飛谷 百香 (北海商科大学)

釜中 凜 (新潟大学)

洋谷 優衣 (鳥取県立境高等学校)

田邊 広大 (筑波大学)

濱田 奈々 (八千代松陰高等学校)

吉田 百合重 (東京都)

長阪 美沙 (啓明学園高等学校)

伊東 青嵐 (北海道)



韓国語川柳・俳句部門  
(応募作数：1,119作)

最優秀賞 (1名)

大城 哉子 (沖縄県)

優秀賞 (2名)

福山 順子 (鹿児島県)

上山 良子 (東京都)

佳作 (4名)

田中 渚紗 (新潟大学)

木野 萌香 (北海商科大学)

佐藤 智萌 (新潟大学)

渡辺 由美子 (東京都)

入選 (12名)

安見 優花 (千葉県)

竹内 万由 (神奈川県)

桐生 梨歩 (新潟大学)

村田 ゆい (鳥取県立境高等学校)

黒田 菜々美 (電気通信大学)

石田 真稟 (立教大学)

小川 有理 (北海商科大学)

金川 えり (奈良帝塚山中学校)

本田 彩華 (東洋英和女学院大学)

山本 優香 (北海商科大学)

行 翔輝 (帝塚山学院大学)

松本 紅音 (鳥取県立境高等学校)



賞

最優秀賞 (各部門1名、計6名)

賞状、副賞 (日韓往復旅行券1名分)

優秀賞 (各部門2名、計12名)

賞状、副賞 (SAMSUNG ブルートゥースイヤホン)

佳作 (各部門4名、計24名)

賞状、副賞 (ミニフォトプリンター)

入選 (各部門12名、計72名)

賞状、副賞 (韓国語学習書)





## 審査総評



呉英元 [二松学舎大学名誉教授]

### 発展の夢と希望へ

受賞者の皆様に心からお祝い申し上げます。

今年も作文コンテストに 4,455 件応募が寄せられ、過去最多の記録の喜びと感謝申し上げます。

年々作品の質や格が上達することは喜ばしく、言葉の表現も練磨されることを期待しています。

日本語エッセイ中高生部門の最優秀者蒲原詩織さんの「「サラン」と「アイシテル」のあいだに」では、韓国語と日本語の言葉について「日本では「愛している」って、あまり言わないんだ。なんだか重たくて、ちょっと照れくさい言葉で…」と言う筆者。それに対する韓国の友人の言葉を聞き、「その言葉に、私はしばらく言葉を失った。たしかに、「愛してる」はまっすぐな言葉だけれど、その分、私はそれを日常から遠ざけてしまっているのかもしれない。感情を細かく分けて、控えめに伝えることで安心する。でも彼女は、そのすべてを「サラン」という一語で、まっすぐに届けてくる。そこには言葉以上のものが、確かに宿っていた。」と説いている。しかし、「私はまだ「愛している」と彼女に言ったことがない。けれど、彼女の「사랑해」に触れるたび、少しずつ心がほぐれていくのを感じている。「サラン」と「アイシテル」のあいだには、簡単に訳せない、だけれど確かにあたたいものがある。たぶんそれは、言葉と文化の間で咲く、小さな光のようなものだろう。いつかその光が、私の声にも宿る日が来ると信じている。」と、結んでいる。

韓国語エッセイ中高生部門の最優秀者李昭始さんの文章は、「「육십 년 고개」의 우정을 잘 부탁해」日韓国交正常化 60 周年にちなんで、中学生 12 歳の筆者が 60 年の友情を語っています。京都に三年坂（産寧坂・さんねいざか）と言う清水寺に続く坂があるそうです。そこで転んだら 3 年以内に死ぬという言い伝えを逆手にとって、何度も転び 30 年、60 年と長生きする話があります。日韓の友情は、一回転ぶ度に 3 年ではなく 60 年延びることにして、未永い友情を願っています。

日本語エッセイ一般部門の最優秀者水島諭子さんの「ドラマがくれた心の橋—韓国と私をつないだ出会い」の文章です。水島さんは、車椅子で生活しています。「街を歩けば、「がんばってるね」「大変そうだね」と、見た目や障がいに対して声をかけられることがあります。相手はきっと親切心から言っているのでしょう。けれど私は、「ひとりの人」として接してほしい。ただそれだけなのに、どこか“特別な存在”として扱われることに、苦しさを感じることがあります。そんな私が、ある韓国ドラマと出会いました。タイトルは『私の ID はカンナム美人』。外見にコンプレックスを持つ主人公のミレが、整形手術をして大学生活をスタートさせるところから物語は始まります。見た目が変われば、すべてうまくいくと信じていた彼女。しかし待っていたのは、新たな偏見や心の孤独でした。私は、その姿に自分を重ねました。」「韓国のドラマは、ただのエンタメではありませんでした。それは、日本に生きる私の心にそっと寄り添い、勇気をくれる存在でした。そして今、私は願っています。文化が違っても、言葉が違っても、心はつながれる。韓国と出会って、私は自分自身とも出会いなおしました。その一歩が、やがて誰かと誰かをつなぐ“橋”になっていく。」

韓国語エッセイ一般部門 最優秀者水山葵さんの「「모국어가 아니었지만 진심이었어」

우리가 맘을 흘린 그날 밤—세상 멀리 있는 “여동생들” 에게—」の文章です。

韓国語でのエッセイ文章でありながら滑らかで流暢な完璧な文章でした。

互いに違う国から来た筆者と後輩たちが韓国でチムジルバンを楽しんでいる。チムジルバンは日本の銭湯やスパのような温浴施設で、筆者たちは汗を流しながら血流の健康法を楽しむ。「흘린 땀만큼 인생은 분명 가벼워지리라. 또 언젠가 그 뜨겁고 시간이 천천히 흐르는 찜질방에서 마음을 터놓고 이야기할 수 있는 날이 오기를 바란다. 그리고 이것만은 잊지 말아 줘. 나는 지금도 너 희들만의 언니야!」





## 審査評

### 日本語エッセイ中高生・一般部門 審査評

桜井泉 [ジャーナリスト]

#### 隣人と出会い、隣国のドラマに学ぶ

今年は、日本と韓国が国交を正常化して60年になります。1965年には、両国で年間2万人程度の往来しかありませんでしたが、今や1200万人が行き来するようになりました。そんな状況を反映し、活発な交流の様子を描いた作品がたくさん寄せられました。

作品は、やはりエッセイですので、調べ物のレポートではなく、具体的な体験や心の動きが分かるものを中心に選びました。タイトルも作品の一部です。「韓日交流」「韓国文化コンテンツ」というテーマそのものではなく、タイトルに誘われて多くの人が読んでみたくするように一工夫していただければと思います。

中高生部門の最優秀賞は、作新学院高校2年の蒲原詩織さんの『「サラン」と『アイシテル』のあいだに』です。高校生交流プログラムで知り合った韓国の友人がよく使う「サランヘヨ」は、日本語にすると「愛してる」となります。でも日本語では、「なんだか重たくて、ちょっと照れくさい言葉」なので、そんなによくは使いません。

その友人に聞いてみると、サランには「ありがとう」も「だいじょうぶ」も「そばにいるよ」も全部、入っているということが分かりました。韓国語を学び始めると、皆さんもきっと「サランヘヨ」という言葉をたくさん聞くでしょう。そういえば、韓国の人たちは写真を撮るときに、指でハートの形をつくりますね。

言葉には、単に辞書を引いただけでは分からない、その言葉が使われる背景やニュアンスがあります。人との交流を通じてこそ、そうした微妙な違いが分かるのです。

一般部門の最優秀賞は、水島諭子さんの「ドラマがくれた心の橋～韓国と私をつないだ出会い」です。車いすで生活している水島さんは、普段、他人から「見た目」だけで判断され、話しかけてもらえなかったり、「できない」と決めつけられたりすることがあるそうです。「ひとりの人」として接してほしい。そんなことを願ってきました。

あるとき、「私の1Dはカンナム美人」という韓流ドラマに出会いました。主人公は、整形手術をして見た目が変われば、すべてうまくいくと信じていたのですが、待っていたのは新たな偏見や孤独でした。それから「他人の目」よりも、自分の思いや生き方を大切にしようとする姿に、水島さんは「大きな勇気をもらった」と書きます。韓流ドラマは、「単なるエンタメ」ではなかったのです。

日本人と韓国人は、顔立ちも似ているし言葉も近い。しかし、当然ながら背景の歴史や文化が違い、人々のふるまい方も異なります。似ていることを確認し、一方で違いにも気づく。交流やコンテンツとの出会いを通じて、そうしたことを楽しめたらいいですね。

60年が過ぎた日韓関係ですが、市民交流の一層の発展を願います。



### 日本語エッセイ中高生・一般部門 審査評

深沢潮 [小説家]

この度、韓日交流作文コンテストの日本語エッセイの審査員を務めさせていただきました。

一般部門、中高生部門ともに、韓日交流というテーマのもと、みなさんの韓国文化や韓国の人々への愛情が文章のはしほしから溢れ出ています。

これだけ韓国のカルチャーが日本で人気になると、K-popやドラマのことを書いている方が多くなるのは当然なのですが、似たような話だな、と感じる作品がいくつかありました。その中できらりと光るものがあつたのは、韓国の音楽やドラマとの出会いによって自分がどう変わったか、どんな眼差しを獲得したか、ということにまで触れている作品でした。自分自身の物語を等身大に書いていたことが、高評価につながりました。

それぞれ、優秀、佳作、入選を決めるにあたり、大きな差があつたわけではありません。私が推したのは、その人ならではの、のストーリーを語っている作品です。

中高生部門の最優秀作品は、そういった意味でも、「サラン」と「愛してる」という単語が、韓国の友人と接した経験から、自分の中の新たな価値観を発見し、視野が広がったことを感じさせる、とても心があたたまる作品でした。

一般部門の最優秀作は、韓国ドラマと自分との関係について、具体的な描写がとても良かったと思います。そして、何より、冒頭と文末が優れていました。エッセイにおいて、(これは小説も同様ですが)冒頭はとても大事です。

文末に関しては、日本(や韓国)の学校教育における作文指導の影響か、高得点を取るためのスキルが身につけてしまっているのか、何かいいことやまとめるような言葉を選びがちのような気がしました。また、正しいこと、前向きな言葉を多用しているのが気になりました。もちろんそれはそれで一定の評価はできるのですが、「どこかで聞いたような言葉」になる危うさがあります。また、あまりにも出来過ぎた文章だと、今だと、チャットGP Tが書いたのでは?と疑われる可能性もあります。

内容についてさらに言うと、エッセイは論文ではないので、自分の主張や社会的、世間的、道徳的正しさを抽象的に書くのではなく、身近なエピソードを描いて欲しいと思います。あるいは、独自の視点を見せて欲しいです。日本の古典文学である、随筆=エッセイ「枕草子」は、清少納言独特の観点で物事や出来事を書いています。決して優等生的な話ではなく、ときには、意地悪なもので、と思うぐらいに批判的だったりひねくれているたりします。このように、エッセイというのは、自由なものだと捉えて欲しいです。全体的に「お利口さん」なエッセイが多かったような気がしますので、殻を破ることを心がけてみるのもいいかもしれません。そういうチャレンジからものを書く面白さや面白さに出会うことができます。みなさんの中からプロの書き手も出てくるのではないのでしょうか。

最後に、タイトルにもう一工夫あれば、という作品も見受けられました。タイトルもエッセイの一部ですので、考え抜いて欲しいです。

とはいえ、眉間に皺を寄せるのではなく、楽しみながら、タイトルを考えたり、エッセイを書いたりして欲しいです。





## 審査評

### 韓国語エッセイ中高生・一般部門 審査評

李允希 [元東京成徳大学教授]

今年は応募者数が増えるだろうと確信しておりましたが、結果はその予想を大きく上回り4千通をはるかに超える応募がありました。応募締め切りの時は、韓国の大統領の来日とも重なり、韓国文化院のスタッフの皆様は嬉しい悲鳴をあけておりましたが、まずはご応募いただいた大勢の皆様と韓国文化院の皆様に深く感謝申し上げます。



審査においては、例年通りではありますが、単に見たことや聞いたことの記録ではなく、如何に素晴らしい表現で深い感動や切実な思いが伝わるように綴ったかに重点を置きました。

今年は韓日国交正常化60周年の記念の年に相応しい作品も多かったですが、その中でも日韓に生きる大人として脱帽するほど感動的な中学1年生の作品があり、ほぼ全員一致で韓国語エッセイ中高生部門の最優秀賞といたしました。

紆余曲折の多い日韓関係を日韓に同じように伝わる삼년고개(三年坂)に例えた作品です。

坂で一度転ぶと3年以内に死ぬと言われていたけれど、転び続けてしまえば3年ずつ命を伸ばせるという伝説をこれからの日韓関係にあてはめた作品でした。

60年の遷暦を迎えるまでに転んでばかりだった日韓関係ですが、転びながらも命を伸ばしてきたおかげで今の日韓の友好を保っていると綴られていました。遷暦は人生の再スタート点であるように日韓の友好も再スタートの時点に立っているのだから、これからは転んだ時には手を差し伸べながら末永く良い友人であってほしいという切な願いが伝わってきました。中学生らしいほのぼのとした文の流れがその願いをより一層感動的に感じさせてくれたかもしれせん。

韓国語エッセイ一般部門の最優秀賞は、様々な国から集まった友人達と習질방(韓国式サウナ)に行った時の心情を綴った作品でした。異なる母国語を持つ友人たちが誰の母国語でもない韓国語で繋がり、たどたどしいけれども言葉の隙間には気持ちがこもっていたという表現、友人から언니(お姉さん)と呼ばれると나 혼자(私一人)ではなく우리(私達)となり互いを支え合うことができ、熱い空気が皆の心まで温めてくれたという表現、ほのかに漂う葉草の香りの中で頬を伝って流れる汗が心の乱れまで洗い流し、息苦しい熱気を温かい温気に変えて一歩踏み出す勇気を与えてくれたという表現など、作品の隅々にまで散りばめられた心の機微を捉えた韓国語の美しい表現に、満ち溢れる感動を覚えました。

何度読み返したことか！ 本当に素晴らしい作品でした。

来年もきっと素晴らしい作品に出逢うでしょう！皆様のたくさんのご応募を心よりお待ちしております。

### 韓国語エッセイ中高生・一般部門 審査評

南潤珍 [東京外国語大学教授]

韓国語エッセイ部門(一般・中高生)の審査をさせていただきました。この部門の応募作は、一般部門が225作品、中高生部門が107作品と、過去最多を更新しました。内容面でも、テーマの展開が完成度の高いものが多く、斬新な構成の優れた作品に触れる、楽しい時間を過ごすことができました。このような貴重な機会を与え



てくださった韓国文化院・東京韓国教育院、そして出品者の皆様に、心からの感謝と敬意を表します。

選考で最も重視したのは、いつもと同じく、与えられたテーマを自分の言葉で表現しているか、そして書いた人の人柄や考えが伝わってくるかという点です。今年のテーマは、例年通りに加え、韓日国交正常化60周年という今年ならではのものが加わりました。このテーマは少し堅い内容になるのではと懸念していましたが、韓日国交正常化60周年の意義を身近な話として砕いて、自分の言葉で述べた個性的な作品も多数あり、その懸念は杞憂に終わりました。すべての作品に個別のコメントをすることはできませんが、ここでは特に「個性の表現」が光った作品を中心にお話しします。

中高生部門の最優秀賞に選ばれた「“육십 년 고개”의 우정을 잘 부탁해」は、手紙の形式を用いて、韓日国交正常化60周年という堅いテーマを適切な比喩で表現した個性的な作品でした。優秀賞の「한국 드라마」も、おなじみの題材を新しい観点から再解釈した作品として印象的でした。韓国ドラマを通じて「片思い」に惹かれていく自身の気持ちを淡々と述べており、作者の素直で真面目な一面がうかがえる、好感の持てる作品でした。

その他の入賞作も、韓国語の学習や韓国文化との触れ合いを通して自身の成長を丁寧に述べた作品や、韓日交流の意義を社会問題解決の側面から捉え、自身の将来像と結びつけた作品など、中高生ならではの考えや経験が活かされていました。作文コンテストを通してこれまでの自分を振り返り、これからの自分を描く時間を持てたことが伝わってきて、嬉しく思いました。

一般部門では、伝えたい内容を短いフレーズに凝縮した、センスあふれるタイトルが印象的でした。K-popの歌詞やドラマのタイトルを応用したものもそうですが、個人的には、日常の物語として読まれる、子どもに韓国語で話しかけ続ける妻の話が「효도(親孝行)」というタイトルとつながることで、韓日交流の奥深さを感じさせた作品が印象に残っています。

一般部門の最優秀賞作は、韓国語や韓国文化が日本と韓国の間だけでなく、第三の国・文化の人々との絆を育ててくれた経験を、「習질방의汗」と「生活の中の汗」を重ねて見事に表現した優れた作品でした。韓国語や韓国文化がメッセンジャーとしての可能性を広げた、と感じています。

今回のコンテスト参加が、韓国文化・韓国語との出会いをより深め、ご自身の可能性を広げるきっかけとなることを願っています。





## 審査評

### 韓国語エッセイ中学生・一般部門 審査評

武井一〔東京都立日比谷高等学校教員〕

応募してくださった皆様、どうも有り難うございました。どれも素晴らしい作品でした。また、例年以上に中高生部門の水準が高かったことも印象深かったです。

中高生部門のなかで、日本と韓国の関係を「私とあなた」の関係に例えた最優秀賞作品、韓国の店で見られる「1+1」などを、「喜びを分け合う」文化の文脈でとらえた優秀賞作品、同じく優秀賞の、韓国ドラマを通じて「사당」に対する自己の感情が変わったものは、水準が高いだけでなく、視点も興味深く、思わず読みふけてしまうほどでした。

作者の関心も多様化しました。自分が経験したことを取り上げたものが増えました。興味深いことに、その多くが経験を通じて自分の変化に気がついたというものでした。また、韓国語を扱った作品の多くに「밥 먹었어?」「다 먹었어?」が登場したことも印象的でした。ほかにも、日本文化に現在の韓国の影響を受けているものがあることを指摘したものなど、選者の視野を広げてくれるものも多数ありました。

言うまでもなく、エッセイは自分の考えを人に読んでもらうものです。それゆえ読者に対する配慮も大切です。その一つに題名に沿って本文を展開するということがあげられます。題名は作者が言いたいことを示します。いろいろなことを書いてしまうと、題名とその文章との関係が曖昧になってしまいます。読者からすると、何を言いたいのか読み取れない文章になってしまいます。そうならないために、まずは何を書きたいのかを明確にしましょう。明確になれば、その文章が必要かどうかは自ずから判断できます。必要でない文章は思い切って削除しましょう。マイナスの発想が大切です。

文章や単語の選択も配慮の一つです。応募にあたって、辞典などを利用することも多かったと思います。下書きをする人も多かったことでしょう。ときおり、ほとんど使われない表現や単語が登場する作品も見られましたが、下書きの段階で、より易しい表現や単語を追求できればよかったですと感じました。複雑な表現を韓国語に直しても、平易な表現に訳しなおすことは困難だからです。自然な韓国語の文章に近づけるためには、辞書などで得た結論などを嚙呑みにしないことが大切です。そして、可能なら母語話者にチェックをお願いします。このことは、韓国語の実力を向上させることにも繋がります。

最後に、中高生部門の佳作作品の中に、好きなグループの会話を聞きたくて韓国語の勉強を始めた。気がついたら「強要されずに自然に」毎日勉強している自分がいた。勉強が苦痛でなく、もっと知りたいと思って勉強を続けることが出来たというものがありません。同様の経験をした人は多いと思いますが、このような経験をバネに、いろいろな分野で自発的に勉強に取り組んで新しい世界を広げられると嬉しいです。韓国語で世界が広がった経験を持っている皆さんだからこそ、広げられるのではないのでしょうか。



### 日本語川柳・俳句部門

兼若逸之〔元東京女子大学教授〕

連日の猛暑、冷たいものが恋しくなります。

体力を付けるために肉料理もしっかり食べたところ。肉料理といえば、以前は「カルビ」「ブルゴギ」などが多く取り上げられていましたが、最近は「タッカルビ」や「サムギョプサル」に押され気味です。「キムチ」「ビビンパ」などの他、「キンパ」「チヂミ」なども基本語彙として定着しつつあり、「オリヤン」「アイスアメリカノ」などの新語も流行の変化を感じさせます。

今年もハングル俳句・川柳（日本語）に多くの方が応募してくださり、心から感謝しております。今回も上位3句を中心に講評いたします。



優秀賞の栗生将信さん作、「本箱に『玉篇』と言う宝あり」は本棚にそれほど大きくはないけれど、それなりの厚みを持った『玉篇(ヨクセン)』があります。『玉篇』というのは部首や画数で漢字の意味や用法を調べることができる辞書で、説明はハングルでなされています。かつては韓国のどの家にもありましたが、電子辞書やスマホなどで簡単に調べられるようになり、韓国の家でも『玉篇』は本棚の隅に追いやり、みかけることも少なくなりました。

作者は若い頃、おそらくは50年ほど前にこの辞書を買って、勉強をなさったのでしょう。当時はハングルなど学んで何になるのかと言われた時代で、なぜ学ぶのかの説明を迫られるほどでした。そうした風潮の中でよく耐えて乗り越えてきたと、この『玉篇』が証明しています。

もう一つの優秀賞、大宮莉桜さん作の「ビビンパを混ぜて心もおだやかに」は「ビビンパ」作りの難しさを思わせませ。日本人が「ビビンパ(비빔밥)」を作ろうと具材を入れて混ぜ始めると、横で見ている韓国人からは混ぜ方が足りない、混ぜ方が遅い、コチュジャンが足りないなどと言われるかもしれませ。この作者は「ビビンパ」をおいしく作ることを、書道で墨をゆっくり磨るように、茶道でお湯がわくのをじっくり待つように、華道で花のバランスをとるように、「道」としての人の在り方を語っているように思われます。「心もおだやかに」という境地はただ一気に具材を混ぜるだけでは得られない穏やかな世界を求めているようです。

最優秀賞、藤本かおりさん作の「菜の花やトルハルバンと背比べ」は済州島の漢拏山(한라산)と黄一色の菜の花畑、そして島のあちこちにある安寧と秩序を守るお祖父さんの石像のトルハルバンを眼前に映し出します。トルハルバンの鼻を撫でる人、肩を触る人、そして背比べする人たち。この句では子供が背比べをしているようです。それを暖かく見守る家族、平和で幸せなひと時を切り取った美しい時空です。平和が脅かされ、世界の秩序回復が一筋縄ではいかない現状を考えると、トルハルバンの重要さが一層強く感じられます。

これらの他にもすばらしい句がいくつもありません。次回の応募もよろしくお願いたします。





## 審査評

### 韓国語川柳・俳句部門 審査評

チョ・ヒチョル [日本薬科大学 客員教授]

今年も例年と同じく全国各地から多くの「韓国語川柳・俳句」作品が集まりました。応募数は1119作品にも上り、老若男女の幅広い層から寄せられました。特に大学生や高校生からの作品が多く見られました。

「韓国語川柳・俳句」部門にはテーマの制限を設けていませんが、多くの作品が韓国を題材にしています。応募者は韓国語だけでなく、韓国の映画やドラマ、音楽、料理など韓国文化全般に関心を持ち、学習を進めていることがうかがえます。



今年「最優秀賞」に選ばれたのは、大城哉子さんの作品です。

- 백 년의 아픔 손잡고 나아가는 천년의 희망  
(100年の痛み 手を取り合って進む 千年の希望)

この句は、これまでの日韓両国の悲しい歴史を踏まえつつ、未来に向けて両国が手を取り合って歩んでいってほしいという願いを込めて詠まれたものです。日韓国交正常化60周年の節目の年にふさわしい作品となりました。

また、「優秀作」には次の作品が選ばれました。

\* 福山順子さん

- 이모, 한 병 더! 쌓여 가는 빈병이 흡사 불링장  
(すみません、もう一本！積み上がっていく空き瓶は まるでボーリング場)

この句は、韓国料理店で次々と注文し、テーブルの上に飲みほした空き瓶が積み重なっていき様子をユーモラスに描いています。店の女性従業員を「이모（イモ）」と呼ぶ光景に、韓国文化への親しみも感じられます。

\* 上山良子さん

- 군대 간 가수 기다리며 겪어 본 고무신 체험  
(軍隊に行った歌手 待ちながら経験した コムシン体験)

好きなアイドルグループのメンバーが兵役に就き、除隊を待つファンの気持ちを「コムシン（軍隊に行った彼を待つ女性）体験」として表現した句です。

さらに、佳作として4作品が選ばれました。

\* 田中渚紗さん

- 아침 침대 위 알람이 멈췄지만 1분만 더!  
(朝ベッドの上 アラームは止まったが あともう1分！)

\* 木野萌香さん

- 한국 드라마 공부라는 핑계로 정주행 시청  
(韓国ドラマ 勉強を口実に 一気見)

いずれも大学生による作品で、学生生活の一コマを切り取った内容です。田中さんの句は、朝起きるつらさをユーモラスに表現しています。木野さんの句は、勉強のつもりがいつの間にかドラマに夢中になってしまう様子を巧みに描いています。

\* 佐藤智萌さん

- 과자는 매번 한 입만 먹자 하고 결국 한 봉지  
(お菓子は 毎回「一口だけ」と思いつつ 結局一袋)

お菓子を食べ始めると止まらない気持ちを「-자 하고」という表現を使って生き生きと表しました。

\* 渡辺由美子さん

- 눈이 빠지게 세계가 기다려 온 멋진 소년단  
(首を長くして 世界が待ちわびた 素敵な少年団)

「눈이 빠지게（首を長くして）」という慣用句を取り入れ、韓国語の学習の成果がよく表れた作品です。

また、「入選」には12作品が選ばれました。

審査のとき、順位をつけることの難しさを毎回痛感しています。残念ながら今回入賞できなかった方も、ぜひ来年の大会に再挑戦してください。화이팅!

<作品の日本語訳はいつでも評者による>





# 受賞作品



## 最優秀賞

## 「サラン」と「アイシテル」のあいだに

蒲原 詩織〔作新学院高等学校〕

秋も深まるある日、韓国の友人から一通のメッセージが届いた。「오늘은 사랑한다는 말이 어울리는 날이야 (今日は“愛してる”って言葉が似合う日だね)」と、夕暮れの写真とともに綴られていた。茜色に染まる空に浮かぶ、ひときわまるな月。それは、彼女がかつて教えてくれた、旧暦の十五夜—チュソクの名月だった。

私は画面を見つめながら、小さく息をのんだ。「사랑해 (サランへ)」。その言葉は何度も彼女の口から聞いたし、メッセージのなかでも折に触れて交わされてきた。だが、私にはいまだに、そのひと言に正しく返す言葉が見つからない。日本語の「愛してる」は、どうしても重くて、胸の奥からするりとは出てこない。まるで特別な日にだけ開ける桐の箱のように、丁寧すぎて日常には馴染まない。

彼女と初めて出会ったのは、ソウルで開かれた高校生交流プログラムのときだった。自己紹介もままならないうちから、彼女は屈託なく笑い、手を引いて市場や古書店を案内してくれた。私は彼女の話す早口の韓国語に追いつこうとし、彼女は私のたどたどしい日本語を真似して笑った。言葉の壁など、思っていたよりずっと低かった。けれど、その最後の日、別れ際に言われた「사랑해요」の響きには、返事をするのができなかった。うれしくて、少しだけこわかった。

その後も、私たちは SNS で連絡を取り続けている。季節の便りや、お気に入りの音楽、時には愚痴も交わしながら、会えない時間を補うように日々を共有してきた。そして彼女は、何気ない場面でも時折「サラン」を使う。喜びも励ましも、まるで柔らかい毛布のように、その言葉で包み込んでくれる。

私はあるとき、思い切って訊いてみた。「日本では“愛してる”って、あまり言わないんだ。なんだか重たくて、ちょっと照れくさい言葉で……」と。すると彼女は、しばらく考えた末に、こう返してきた。

「でもね、“サラン”には、“ありがとう”も、“だいじょうぶ”も、“そばにいるよ”も、ぜんぶ入ってるんだよ。」

その言葉に、私はしばらく言葉を失った。たしかに、「愛してる」はまっすぐな言葉だけれど、その分、私たちはそれを日常から遠ざけてしまっているのかもしれない。感情を細かく分けて、控えめに伝えることで安心する。でも彼女は、そのすべてを「サラン」という一語で、まっすぐに届けてくる。そこには言葉以上のものが、確かに宿っていた。

私はまだ「愛してる」と彼女に言ったことがない。けれど、彼女の「사랑해」に触れるたび、少しずつ心がほどけていくのを感じている。「サラン」と「アイシテル」のあいだには、簡単に訳せない、だけど確かにあたたかいものがある。たぶんそれは、言葉と文化のあいだで咲く、小さな光のようなものだろう。

いつかその光が、私の声にも宿る日が来ると信じている。



## 優秀賞

## 変わらないもの、変えられるもの

石原 優衣香〔山梨英和高等学校〕

「私は皆さんのことが大好きです。」この言葉は、学校の韓国研修の際、堤岩里教会での日本軍による虐殺について説明する前に、ガイド兼通訳の韓国人の方が私たちに向けてかけてくださったものでした。

堤岩里教会事件は、朝鮮半島の独立運動史において、日本軍による非人道的行為の実相を象徴する出来事とされています。朝鮮半島内のどの地域よりも激烈であった華城市民の抗日闘争は、日本軍の残酷な鎮圧を招きました。日本軍は暴動の首謀者をキリスト教徒と見なし、信者を射殺、または刺殺しました。その後、教会に火が放たれ、延焼によって二十八戸の家屋が焼失し、女性一人が焼死しています。さらに、日本軍は運動の首謀者の名簿を入手し、十五歳以上の男子二十一名を焼き殺しました。現場に駆けつけた女性二名も、斬首や銃撃により命を奪われました。

そのような行為を語る中で、「私は皆さんのことが大好きです」と言葉をかけてくださった事に、私は深い感謝の気持ちを覚えると同時に、かつての日本軍の行いに対して強い憤りを感じました。

私たちはしばしば、原爆など日本が受けた被害の歴史について学ぶ機会があります。一方で、日本の朝鮮統治における加害の歴史については、その残虐性が語られることが少なく、隠されがちであるように感じました。

1919年の三・一独立運動で中心的な役割を果たした独立運動家・柳寛順烈士は、私の学校の姉妹校である梨花女子学校の学生でした。彼女は日本軍の拷問を受けながらも独立運動を貫き、獄中で命を落としました。堤岩里教会を訪れた後、私たちはダブル公園で柳寛順烈士の三・一運動を描いた壁画を見学しました。大きな太極旗を掲げ、群衆の先頭に立って日本軍に立ち向かう彼女の気高い姿を前に、私たちは日本による支配に屈しなかった朝鮮の人々の愛国心を想い、尊敬と謝罪の気持ちを込めて静かに祈りを捧げました。

日本と韓国は地理的に非常に近い国でありながら、長い歴史の中で多くの悲しみと対立を経験してきました。そのため、現在においても両国の関係には繊細さや難しさが残っています。それでも、ガイドさんをはじめ、今回出会った多くの韓国の方々には、日本人である私にも優しさや親切さを示してくださいました。その温かさには、私は深く心を打たれました。悔恨の歴史であったとしても、それが実際に起きた出来事である限り、永遠にその国の記憶から消えることはありません。しかし、過去に目を背けず、正面から向き合い、謝罪と対話を積み重ねていくことで、未来の関係性をより良いものにしていくことは可能だと私は信じています。それこそが、私たち若い世代に託された大切な使命なのだと思います。私は実際に目で見て現地の方と交流する事で、韓国という国を深く知り、そして心から好きになりました。

これからも、過去を忘れず、未来へと歩んでいける自分でありたいと思います。



## 優秀賞

## 心をつなぐ韓国の伝統、품앗이

小林 泰勳〔聖光学院中学校〕

ある日、韓国の祖父とお茶を飲みながら話していたときのことだ。湯気越しに「품앗이って知ってるか？」と聞かれた。発音はちょっと耳慣れないけれど、どこか柔らかい響き。祖父いわく、これはもともと韓国の農村で始まった「お互いさま」の助け合いの仕組みらしい。田植えや収穫の時期になると、村の人たちが順番に集まって作業を手伝い、借りの労力は別の機会に返す。お金じゃなくて、時間と手間のやり取りで成り立ってきた文化だという。

もっとも祖父自身は農村育ちではない。都市部で生まれ育ち、ずっと会社勤めだったそうだ。それでも若い頃、近所づきあいの中で품앗이的な場面に何度か遭遇したらしい。たとえば友人の引っ越しをみんなで手伝ったあと、昼食に手料理をごちそうになったり、逆に、自分が友人宅の片付けや修理を手伝いに行ったりしたこともあったという。形は農作業じゃないけれど、互いの労力を融通し合う感覚は、まさに都市版の품앗いだ。

日本にも似たような文化がある。「結（ゆい）」と呼ばれるもので、かつては農村で家を建てたり田畑を手入れしたりする際に、人手を出し合う習慣だった。ただ、現代ではこの言葉自体を知っている人は少ない。今は自治会の清掃や祭りの準備、防災訓練などに形を変え、名前は違っても「助けてもらったら返す」という精神だけは残っている。

考えてみれば、今の都市生活は、隣の家の人の名前を知らないことだって珍しくない。私自身、日本で暮らしていて近所づきあいは挨拶程度だ。だからこそ、품앗이のように助け合いを生活の中に組み込む文化は、新鮮でちょっとうらやましくもある。

この考え方は、学校や国際交流の場にも生かせそうだ。テスト前に友達に数学を教えてもらって、今度は英作文を手伝う。そんなやり取りだって広い意味での품앗いだと思う。もし日本の学生が韓国でイベント運営を手伝い、韓国の学生が日本で地域活動に参加するような機会があれば、それは現代版の国際품앗いになるだろう。

祖父の話を通して、私は품앗이가単なる作業のやり取りではなく、人と人をつなぐ関係づくりの一つの形だと知った。その在り方は、形や呼び名が変わっても、きっと国や世代を越えて受け継がれていく。私も、日常の中でその精神を大事にしていきたい。



# 佳作

## 私は日本のオンニ

光岡 優希 [さいたま市立大宮国際中等教育学校]

「韓国語を話せると思うけど行く？」と父が私を韓国の友人たちとの集まりに誘ってくれました。韓国ドラマが好きな私は、日本語の字幕がなくてもドラマが楽しめるくらいに韓国語が上達し、韓国語を話したいと思っていたのです。

集合場所は、新大久保の韓国料理屋。お店に入ると「ミツオカシ！」と父の友人のドンファさんが声を掛けてくれました。私はドンファさんの後輩のウビンさんという方の隣に座りました。ウビンさんは中学2年生と小学5年生の娘さんを持つお母さんで、2年前に日本支社に転勤になりました。ウビンさんは悲しそうに、「二人の娘は日本の公立の学校に通っているけれど、日本語がむずかしくてなかなか進んでいない」と話していました。特に中学2年生の娘さんは、テストで0点が続き、だんだん元気がなくなってきているそうです。私は『何か力になりたい』と思いました。その時、ウビンさんの携帯に中学2年生の娘さんから電話がかかってきたのです。ウビンさんは少し話した後、私と一緒にいることを伝え、電話を代わってくれました。それが私とユナの出会いです。私とユナは同じアイドルグループを推していることで意気投合し、さっそく次の土曜日に会う約束をしました。ウビンさんは「ユナに日本のオンニができた～！」ととても嬉しそうに目を輝かせていました。その時、私はユナにとっての“日本のオンニ”になったのです。

約束の日、私はユナの家に向かいました。ユナの定期テストに向けて、一緒に勉強することになったのです。ユナの部屋に入った私は、目を見張りました。部屋の壁一面に0点のテストが貼られていたのです。いつもこれを見ながら、悔しさをバネに勉強をしているのだとユナは教えてくれました。どんなに大変で辛くても、決して諦めないユナの姿勢に私は心を打たれました。ユナは問題の意味が分かれば解くことができるので、単語や他の言い回しを理解できるように練習を重ねました。ユナが自分だけ教えてもらうのは申し訳ないと言うので、私は TOPIK4 級を取得するために韓国語をユナに教えてもらうことにしました。私たちは、お互いの得意を共有しながらともに学び合い、仲を深めていきました。

ある日、ユナから電話がかかってきました。これまでずっと20点以下だった定期テストで、なんと全教科50点以上を取れたのです。「オンニのおかげ！」と喜ぶユナの声は、涙ぐんでいるように聞こえました。

私にとってユナは、全く違う文化や考えを教えてくれる唯一の友達です。「韓日交流」とは決して大規模で難しいものではなく、私とユナのような小さな輪が広がっていくことで達成されるものではないでしょうか。私は将来、韓国に留学したいと考えています。有意義な留学にするため、TOPIK4 級が取れなければ留学はしないと決めました。来年、ユナは高校に進学するため韓国に帰ります。韓国で再開できるよう合格を目指して努力します。

オンニ、頑張ります！



# 佳作

## 発酵でつながる、チョングッジャンの旅

笠松 こすも [板橋区立第五中学校]

私は昔から「発酵」が大好きだ。

発酵には不思議な力がある。時間と菌と素材が会って、じんわりと何かが変わっていく。目には見えないけれど確かに存在するその変化を、私は小さな魔法のように感じている。

ある日、韓国の「チョングッジャン (청국장)」という発酵食品の存在を知った。味噌のような、納豆のような…けれど少し違う豆の発酵食品らしい。私は「これ、作ってみたい!」と思った。でも日本語で検索しても、レシピがほとんど見つからなかった。

そこで思い出したのが、去年の秋に参加した世界中の10代とつくる有楽町アートプロジェクト「Night Walks with Teenagers」で出会った韓国の友達、イエウォンちゃんだった。彼女とは東京・有楽町で一緒に夜のまちを歩きながら、言葉や国の違いをこえていろんな話をした。その後もInstagramで交流が続いていて、私たちはお互いの文化や好きなことをよくシェアしていた。

思いきって「チョングッジャンの作り方、知ってる?」と韓国語でメッセージを送ると、イエウォンちゃんはすぐに返事をくれて、家族に聞いてくれたり、レシピやコツまで丁寧に教えてくれた。材料の中に「ソルチ粉」という聞いたことのないものがあり、私は「これ何だろう…?」と調べても分からなかった。でもイエウォンちゃんが「煮干しのようなものだよ」と教えてくれて、私は一気にイメージが湧いた。名前は違っても、日本のだし文化と通じるものがあることに気づいて嬉しくなった。

私はスマホ片手に翻訳アプリと格闘しながら、キッチンでチョングッジャン作りに挑戦した。

まず大豆をやわらかく煮て、熱湯で消毒した藁と一緒に壺に入れる。藁には自然に生きている納豆菌がいて、それが発酵を助けてくれる。日本の昔の藁納豆ととても似ていて、「こんなふうに遠く離れた国でも同じ菌が活躍しているなんて!」と私は感動した。見えない菌の力が、美味しいものを生み出してくれている。その不思議さと面白さが、私は大好きだ。数日後、粘りと香りが出てきた大豆に、唐辛子、にんにく、煮干し粉を加えてさらに熟成させる。見た目も匂いも、初めてのことはばかりだったけれど、私は毎日ワクワクしながら壺の中をのぞいた。まるで小さな生命が生まれていくようだった。できあがったチョングッジャンは、日本の納豆とも味噌とも違う、だけどどこか懐かしい味がした。家族も「美味しい!」と喜んでくれて、私はその味に、イエウォンちゃんとのつながりや、遠くの国の文化を感じた。

韓国にはまだ行ったことがないけれど、好きなものや楽しいことで、国をこえて“根っこ”がつながっているんだと私は実感した。チョングッジャンを作ったことは、私にとって「発酵でつながる日韓交流」のはじまりだった。

これからも私は、見えない菌のチカラと、見えない気持ちのつながりを信じて、発酵の旅をつづけていきたい。



## 佳作

## 天国の祖母との思い出の地、釜山

牧 心音〔上宮高等学校〕

私の住む大阪の南港から釜山行きのフェリーが出航しています。小学3年生の夏、人生初の海外旅行は、フェリーで行った韓国・釜山でした。船が大好きな祖母が幼い私を大冒険に連れて行ってくれました。船に乗った瞬間、日本語ではない言葉が飛び交い、夜には大きなステージで音楽や手品のショーがあり、豪華な船旅でした。それ以来、祖母と私は毎年のように韓国旅行へ行きました。

港に着くと、いつも迎えに来てくれるガイドのキムさんは、祖母を「先生」と呼び、とても良くしてくれました。まずは腹ごしらえに市場へ行き、新鮮な海鮮を味わい、買い物を楽しみ、夜はマッサージや食べ歩き。いつも弾丸ツアーでしたが、食事も買い物も満喫し、帰りはゆっくり船で休みながら帰国する、祖母と私の恒例の旅でした。

しかし、小学6年生のとき、祖母に癌が見つかりました。手術はできましたが、既に進行していたため、余命を受け止める必要がありました。その頃、コロナも世界に蔓延し、恒例だった釜山の旅が遠い昔のように感じられるようになってしまいました。抗がん剤治療を続け、少し元気になった祖母の目標は、もう一度船で釜山へ行くことでした。

「ここちゃん、絶対ばあばをもう一度釜山に連れて行ってね！」と祖母は言い、「うん！絶対行こうね！」と約束しました。祖母の願いが叶い、コロナが落ち着いた頃、車いすで釜山へ行くことができました。家族はこれが最後の旅行だと覚悟していた事もあり、私も母も母の弟も一緒に、念願の釜山の旅に出発しました。

いつものようにキムさんのお迎えから始まり、少ししか食べられなくなった祖母も、キンパやキムチを喜んで食べ、大喜び。お土産もたくさん買い、夜はエステに行ってお肌もつるつるに。まるで癌がどこかに行ってしまったかのように元気になりました。弾丸ツアーを終え、帰国後すぐ、「ここちゃん、来年も行こうね！」と約束し、私たちは本当にまた行けると信じていました。しかし、その約束は叶わず、旅行から半年後に体調が急変し祖母は寝たきりになってしまいました。私はずっと祖母の側で介護を続け、背中を摩りながら、毎日のように思い出話をしました。「ばあば、私、今韓国語を勉強しているねん。次に釜山に行ったときは、買い物で値切らなあかんやろ。」祖母は優しく笑って、「頼もしいわあ。ばあば、たくさんお金持っていかなあかん。」

祖母との旅行の夢は叶わなかったけれど、私の韓国語の勉強は続いています。祖母が天国から見ていると信じて、「한국어 공부 열심히 할 거야!!」と誓い、祖母が出会わせてくれた国と人に韓国語で感謝の気持ちを伝える事ができるように。そして、いつか微力ながらも日韓交流の懸け橋として活躍できるよう命ある今を大切にしたいと思います。



# 佳作

## 韓国文化コンテンツ

渡邊 菜々 [法政大学国際高等学校]

初めてハングルを見た日のことを、今でも覚えている。中学一年生の冬の夜、家族が寝静まったリビングで、テレビに流れていた韓国ドラマ。その字幕に並ぶ文字は、漢字でも、ひらがなでもなかった。小さな丸やまっすぐな線、そして点でできたその文字は、まるで記号のようでありながら、不思議と温かく、優しい雰囲気をもっていた。意味はわからないのに、なぜかその形と音に心を引き寄せられたのだ。そんなわたしが高校生になって、偶然にも学校で韓国語を習うことになった。「あの心惹かれた文字の秘密を知れる」と思うと、胸が高鳴らずにはいられなかった。

韓国語を学び始めて最初に思ったのは、「ハングルは音を表すために作られた合理的な文字」だということだった。母音は縦線や横線、丸の組み合わせからできていて、子音は、発音する口や舌の形をもとにデザインされている。パズルを組み立てるように文字が完成し、誰でも正確に発音できる。その仕組みを知ったとき、わたしは思わず「美しい」と感じた。そして、それが十五世紀に世宗大王が読み書きできない人々のために作った文字だと知った瞬間、単なる言語ではなく、人を思いやるために生まれた「贈り物」のように感じられたのだ。

日本語の文字は、漢字・ひらがな・カタカナの三種類が共存している。漢字は意味を、ひらがなとカタカナは音を表す。それぞれが異なる役割を持ち、文章は重厚さと柔らかさを同時に宿す。一方で、ハングルはすべてが音を表す文字であり、形の規則性が高く、整然と並ぶ姿は軽やかで、音楽のようなリズムを感じさせる。日本語の文章が多彩な絵の具だとすれば、ハングルは限られた色で描くシンプルなデザイン画だ。違うからこそ、それぞれに独特の美しさがある。

わたしはまだ韓国に行ったことがない。それでも SNS や動画で見る韓国の街には、色とりどりのハングルが溢れている。カフェの看板に描かれた丸い母音は柔らかく、駅の案内板の直線的な子音はキリッとしている。韓国では、文字の形そのものが街の景色を彩っているように見える。日本の街の看板が漢字の力強さやひらがなの柔らかさで個性を出すように、韓国は統一感のある形の中で色や配置、書体の工夫で魅力を生み出している。その洗練されたバランスに、画面越しでも文化の違いを感じることができた。

自分の名前を初めてハングルで書いた日。まるで鏡文字のように新鮮で、でも不思議とじっくりくる形に心が高鳴った。その瞬間、自分と韓国の距離が少しだけ縮まった気がした。文字はただの記号ではない。そこには歴史があり、価値観があり、人々の想いが宿っている。

今では、街でハングルを見かけると、そこに込められた人々の声や温かさが浮かんでくる。丸と線の向こうに広がるのは、私たちが知らない韓国の物語。ハングルを通して出会った文化と人の心が、これからもわたしに新しい世界を見せてくれるだろう。



## 最優秀賞

ドラマがくれた心の橋  
- 韓国と私をつないだ出会い

水島 諭子〔大阪府〕

私は車椅子で生活しています。

街を歩けば、「がんばってるね」「大変そうだね」と、見た目や障がいに対して声をかけられることがあります。相手はきっと親切心から言っているのでしょう。けれど私は、「ひとりの人」として接してほしい。ただそれだけなのに、どこか“特別な存在”として扱われることに、苦しさを感じることがあります。

そんな私が、ある韓国ドラマと出会いました。

タイトルは『私のIDはカンナム美人』。

外見にコンプレックスを持つ主人公のミレが、整形手術をして大学生活をスタートさせるところから物語は始まります。見た目が変われば、すべてうまくいくと信じていた彼女。しかし待っていたのは、新たな偏見や心の孤独でした。

私は、その姿に自分を重ねました。

私もまた、車椅子という「見た目」だけで判断されたり、話しかけてもらえなかったり、「できない」と決めつけられたりすることがあります。「私はここにいるのに」と、心の中で何度も叫んだことがあります。

ドラマの中で、ミレは少しずつ「他人の目」よりも「自分の心」と向き合うようになります。

見た目ではなく、自分の思いや生き方を大切にしようとする姿に、私は大きな勇気をもらいました。

そして、「私も私のままでいい」と、少しだけ自分を受け入れられるようになったのです。

このドラマをきっかけに、私は韓国の文化に興味を持つようになりました。

特に目を引かれたのは、ドラマの登場人物たちのファッションでした。

明るくて個性的な色づかいや、シンプルなのに洗練されたスタイル。

車椅子に座っていても、色や形の選び方で、私らしい表現ができるんじゃないかと、ワクワクしました。

「どうせ目立つなら、自分らしく目立とう」

そんな前向きな気持ちが、私の中に芽生えたのです。

そして何より、同じように悩み、同じように葛藤する登場人物たちを見て、私は思いました。

「国が違って、こんなにも心が通じるんだ」と。

自分の生き方と重なるような感情にふれ、私は「韓国」という国が、ぐっと近くに感じられるようになったのです。

それと同時に、私は日本社会の中でも、「見た目」や「違い」ではなく、その人の中にある想いをもっと見ようとする気持ちを持てるようになりました。

私自身も、人を見た目や肩書で決めつけてしまうことがあったのではないかと——そんな反省と学びも、この出会いがくれた大切な気づきでした。

韓国のドラマは、ただのエンタメではありませんでした。

それは、日本に生きる私の心にそっと寄り添い、勇気をくれる存在でした。

そして今、私は願っています。

文化が違って、言葉が違って、心はつながれる。

韓国と出会って、私は自分自身とも出会いなおしました。

その一歩が、やがて誰かと誰かをつなぐ“橋”になっていく。

そう信じて、私はこれからも“心のまなざし”と“私らしい色”を大切に生きていきたいと思います。



## 優秀賞

## キンパもおにぎりも美味しい件について

福田 美香子〔創価大学〕

福岡に生まれ育った私は、韓国という国をどこか“近所の誰か”のように感じている。福岡から韓国までは、東京に行くよりも距離が近い。町を歩けば韓国語の看板が目に入り、韓国料理店も多く並ぶ。私の通っていた高校の最寄り駅である薬院駅の周辺にも、たくさんの韓国料理店がある。

高校から自宅までは、電車を乗り継いで帰るほど距離があった。お腹がすく放課後、私は薬院駅近くでキンパを買って、乗車前のひとときに食べ歩きしていた。おにぎりが好きな私にとって、キンパはちょっとしたご褒美のようなもので、食べやすく、身近で、そして何より美味しかった。

そんなある日、キンパを片手に駅へ向かっていると、韓国から観光に来ていたご夫妻に声をかけられた。「この近くに一蘭はありますか？」と、翻訳アプリを通して話しかけられた。私は少し緊張しながらも、天神駅まで案内することにした。薬院駅周辺には一蘭がなく、天神駅の店舗を案内する方が確実だったからだ。

道案内には慣れていたはずだった。でも、韓国の方と直接やりとりするのはこのときが初めてで、心臓はずっとバクバクしていた。翻訳アプリを使いながら、沈黙にならないように、そして間違わないようにと、頭の中でずっと言葉を探していた。けれど、ご夫妻がさっぱりとした様子で話しかけてくださったことで、次第に緊張が和らいでいった。

その中で、「それ、キンパだよね？」と、ご主人が笑いながら声をかけてくださった。私は「おにぎりが大好きだから、友人に勧められてキンパを食べるようになったんです」と翻訳アプリを使いながら伝えると、「おにぎりもおいしいよね！」と返してくださった。そこから、好きな具材の話になり、「本場のキンパは、辛めのキムチを多めに入れると甘みが引き立って美味しいんだよ」と教えていただいた。

その日以来、私はキンパを自分で作ることも増えた。大学進学を機に一人暮らしを始めたこともあり、ネットのレシピを見ながら、気が向いたときに作るのがちょっとした楽しみになっている。材料も身近で手に入れやすく、おにぎりのような感覚で作れるのが嬉しい。なにより、“あのときすすめられた辛めのキムチ”だけは、今も欠かさず使っている。

私はまだ韓国に行ったことがない。直接会った韓国の方も、今のところそのご夫妻が最初で最後だ。それでも、あの道案内の時間が、私にとって韓国という国を“顔の見える存在”に変えてくれた。それまでは文化や料理が好き、という漠然とした親しみだったけれど、そこに人とのやりとりの記憶が加わって、よりあたたかく、よりリアルなものになった。だから私は、キンパを作るたび、あの日の会話と韓国という国の温かさを思い出す。

韓国料理は、味だけでなく、人との心のつながりをくれる大切な存在だ。



## 優秀賞

## 2つのアイデンティティ、1つのからだ

浅野 まな〔国際基督教大学〕

私の母が韓国人であることを知ったのは、小学6年生の時だった。初めてスマートフォンを買ってもらったあの日、ケータイショップの店員が知らない苗字で母を呼んだのだ。そこからだった。私の中に新しいアイデンティティが流れ込んできたのは。

偶然にも BTS に夢中だった当時の私にとって、自分が韓国人の娘であることは喜ばしく、誇らしいニュースだった。しかし母は、なぜか気まずそうにそのことを告げた。見たことのない表情をしていた。当時はよく分からなかったが、今なら彼女の心情を想像できる。すかさず胸がギュッと締め付けられるような感覚に襲われる。

母は日本で生まれ育ち、韓国で暮らしたことはおろか、韓国語も話せない。それなのに日本人ではないという事実は、彼女に激しい葛藤をもたらした。両親から「このこと、絶対に誰にも言ったらあかんよ」と言われた日から、まるで自分の存在そのものが罪であるかのように感じてきたという。大学の卒業証書を受け取った時や結婚の手続きをしている時など、幸せに満ちたはずの瞬間でさえ、嫌でも自分の出自を自覚させられ、その感覚からは逃げられなかった。国籍をめぐる、やり場のない怒りや終わりの見えない苦しみを抱える母と、むしろ誇らしく思う私。この対照は、世代を隔てた社会の変化を鮮明に映し出しているように思える。

母と私が共に過ごしてきたこの20年間を思い出しながら、日韓の歩みを振り返る。2000年代には、在日コリアンの社会運動により、外国人登録証の指紋押捺制度が廃止されるなど、様々な制度の改善が進んだ。また、日韓ワールドカップや韓流ドラマのブームが、韓国文化への関心を一気に高めた。私が最近注目しているのは、日韓の若者の間で生まれた「ハンボノ（ハングルとイルボノ＝日本語を掛け合わせた造語）」だ。「それチンチャいいね！」といった、日本語と韓国語が自由に混ざり合った表現は、境界線を軽やかに越えていく人々の姿を連想させる。さらに2024年には、韓国のテレビ局がそれまで自主規制していた日本語の歌を放送し「韓日歌王戦」という番組が高視聴率を記録した。国交正常化から60年。依然として差別や偏見が社会に残っているものの、文化を通じた交流が確実に広がっていることに、私は希望を抱かずにはいられない。

2つのアイデンティティを1つのからだに背負うことを、ときに重たく感じる。それでも、私は自分にできることを一つひとつ積み重ねていきたい。日韓の歴史や文化、言葉が混ざり合う激しい潮目に身を置き、両国の人々をつなぐ役割を果たすこと。それが、私の考える「日韓の架け橋」への第一歩である。そしていつの日か、誰がどんなアイデンティティを持っていても、胸を張って祝福される世界を歩める、そんな未来を残したい。



# 佳作

## 95歳のホームステイ

田原 彰人 [埼玉県]

韓国から95歳のハラボジが僕の家に来てくれた。

ハラボジにとっては二度目の日本、そして初めての東京だ。

2024年1月。僕が出張で家を不在にする機会を利用し、韓国人である妻の母と叔母、そして叔母の娘の3人と一緒に、韓国から飛行機を乗り継いでやってきた。

3LDKの狭いマンションで、僕の家族（妻と息子）、そして韓国からやってきた4人が約1週間生活する。高齢のハラボジが不便をしないようにと、他の親戚一同はリビングで雑魚寝、ハラボジには僕の部屋を貸し切りで使ってもらうことになった。

出張中は妻からたくさん写真が送られてきた。東京タワー、浅草寺、草津温泉まで。とても95歳には見えない。背筋がピンとれている。ベレー帽がお似合いだ。はとバスに乗って都内の名所を巡り、Z世代に混じって原宿の竹下通りを散歩した。温泉では9歳の僕の息子に案内され、2人きりで大浴場に浸かっていたという。妻からその話を聞いたとき、はたしてハラボジは95歳にして、日本人の血が混じった自分のひ孫と2人で日本の温泉に入る余生を想像できたのだろうかと思った。

激動の10代だっただろう。16歳で光復節を迎えると、間もなく故郷の済州島で4.3事件が勃発。その後すぐに朝鮮戦争へ。ハラボジは海兵隊員だったようで、仁川上陸作戦時の参戦勇士として今でも記念行事に招待されている。

出張を終えて僕が家に帰宅すると、ハラボジ一行が滞在していた痕跡は何も残っていなかった。だけどたしかに滞在していたのだ。リビングで乾杯している写真や玄関前で撮った最後の集合写真まで送られてきたのだから。

ただ唯一、僕の部屋だけは何か違った。

出張荷物の後片付けを終えた僕は部屋の床に寝転んだ。そして真っ白い天井を見上げた。きっとハラボジも、こうしてこの天井を見上げていたことだろう。何を思っただろう。

思えば僕はハラボジと挨拶以外の会話をまともにしたことがなかった。日本人である自分は避けられているかもしれない勝手に思っていたから。だけど僕の部屋にハラボジが1週間も滞在していたという事実、自分が受け入れられているような気がした。強い絆で結ばれたというか。

ハラボジとは血のつながりはない。だけど巡り巡ってきた縁。

その縁を通して僕の人生も繋がっている。ハラボジが歩んできた人生と。そしてその人生の繋がりは息子へと続いていくはずだ。僕よりももっと特別な絆でハラボジと結ばれている息子に。その絆がいつまでも途切れることのないように結びつけるのが、僕の役目なのかもしれないと思った瞬間、僕はこの部屋を息子に譲ることに決めた。

今年の夏は済州島に行ってハラボジの家を訪問するつもりだ。息子と一緒に。今年96歳になるハラボジに、日本でのホームステイはどうだったか、真正面から聞いてみたい。



# 佳作

## 小さな架け橋

小林 拓馬 [広島大学]

小学校四年生の時、父と一緒に韓国旅行に行った。その目的は二つあった。一つは、当時開催されていた万博に行くため。そしてもう一つは、「リーさん」会うためだった。

リーさんは韓国人で、当時父がインターネットで知り合った。そこで父がリーさんに今度韓国に行くことを伝えたところ、そこからとんとん拍子に話が進み、ぜひ会おうという話になったみたいだ。それを聞いて、僕は不安な気持ちになった。人見知りだったということもあり、コミュニケーションがうまくとれるか心配だったのだ。だから僕は韓国語を少しでも覚えようと頑張った。しかし結局覚えられたのは、「アンニョンハセヨ」と「カムサハムニダ」の二つだけだった。

やがて韓国に到着した僕と父は、空港から電車を乗り継ぎ、見晴らしの良い展望台のような所に来た。そこには既にリーさんの姿があった。そしてリーさんの後ろにもう一人、僕と同年くらいの少女の姿があった。

「アンニョンハセヨ」

父とリーさんが挨拶を交わす。しかし僕は挨拶をせず、その少女の姿に見入っていた。その様子を察したのか、リーさんが「私の娘です」といって紹介してくれた。本当に、同年の子だった。

僕はそこで初めて「アンニョンハセヨ」と言った。すると彼女も「アンニョンハセヨ」と挨拶を返してくれた。僕はそれまでとても緊張していたが、言葉が通じた瞬間、その緊張は喜びへと変わった。

その後、近くのテーブル付の椅子に座り、向かい合ってお話することになった。父の正面にはリーさんが座っており、二人は英語を使って会話をしていた。僕の正面には少女が座った。そして彼女はメモ帳のようなものを取り出し、何かを言ってそれを僕に渡した。

僕はそれを受け取ったのはいいものの、彼女が何を言ったのかが分からず、困惑していた。するとリーさんが

「日本では何が有名なのか、それを書いてほしいと言っているよ」と補足してくれた。

僕は悩んだ。日本には有名なものがたくさんあるけど、それらを韓国語で書くことはできない。一体、どうすればいいのだろうか、と。そんな時、ふと思いついたものがあった。僕はすぐさまペンを手に取り、慣れた手つきでそれを描いた。それは「ドラえもん」の絵だった。日本人なら誰もが知っているドラえもんの絵かきうた。それにならって描かれたドラえもんは、彼女の目を輝かせた。

「ドラエモン！」

彼女はそう喜んだかと思うと、鞆から色鉛筆を取り出し、なんと僕の描いたドラえもんの色を塗ってくれたのだ。そしてこの瞬間、日本と韓国との小さな架け橋が繋がったような気がした。僕は心の中でこう呟いた。

「カムサハムニダ。ドラえもん」



## 佳作

両手を取り合い、より良い未来へ  
— 漢江ラーメンの視点から —

松田 陽希 [帝塚山学院大学]

先日、私は漢江公園を訪れた。「漢江」と聞けば、誰もがきらびやかな夜景と大きな橋、ドラマの中の胸躍る告白シーン、さらにはノーベル文学賞を受賞した作家・韓江を思い浮かべるだろう。けれども、私には少し特別な思い出がある。それはまさに「漢江ラーメン」である。

最初は疑問に思った。ラーメンの元祖である日本から来た私が、わざわざ漢江でラーメンを食べる必要があるのだろうか。しかし実際に調理器で作ってみると、その味は全く違っていた。水を通常より100ミリほど少なく入れ、麺を少し硬めに仕上げることで、コシがあり、やや塩気の効いた独特の味わいになるのだ。その微妙な違いこそが、人々を行列させる秘密なのだと言われた。都会の真ん中で味わった、素朴ながらもどこかロマンチックな夜ご飯は、長く心に刻まれるものとなった。

だがこの体験は単なる「味」だけの話ではなかった。授業で学んだ「漢江の奇跡」が自然と頭に浮かんできた。朝鮮戦争直後、マッカーサー将軍は「ソウルの復興には100年以上かかる」と言った。しかし、わずか数十年のうちに、ソウルは世界的な都市へと成長したのだ。だからこそ、漢江ラーメンは単なる一食の食事ではなく、平和と繁栄を添えた特別な料理のように感じられた。

今年は日韓国交正常化60周年だ。南山タワーと東京タワーが同時にライトアップされる光景を見たとき、胸が熱くなった。二村漢江公園で、赤や青に輝く南山タワーを眺めながら熱々のラーメンをすすっていると、平凡な一食がまるでドラマのワンシーンのように変わっていった。隣に素敵な彼氏がいれば、もっと完璧だったのに…そんな冗談まで口をついて出た。

もちろん、両国の間には未だに解決すべき課題が多く、感情の絡みも複雑だ。それでも私は信じている。漢江大橋に刻まれた「あなたは一人ではありません」という言葉が、両国の未来にも通じると。互いにもう少し心を寄せ合えば、日韓関係も漢江の奇跡のように新たな道を切り拓けるはずだ。

最後にちょっとしたコツを一つ。漢江ラーメンは水を少なくして煮込むため、麺が鍋底に焦げ付かないよう、常にかき混ぜ続けなければならない。気を抜くとすぐに焦げてしまうのだ。日韓関係も同じである。放っておけば底が焦げてしまうからこそ、互いの思いやりと手間が必要なのだ。ラーメンが特別な感動を与えるように、両手を取り合う努力の中でこそ、より深い味わいが生まれるだろう。たとえごく短い瞬間が訪れても、ラーメンのようにズルズルッと流してしまえばよい。そうして笑い合いながら共に歩めば、必ずより良い未来が訪れると、私は固く信じている。



# 佳作

## 国境線に住む魚

イヒョンチョル〔大阪公立大学〕

太陽は空高く昇り、海を照らしていた。激しく波打つ海面はその光を反射させ、至る所に届ける。燦然と照らされているのは人工的な国境線だ。

僕は、5歳まで韓国で過ごし、それ以降は日本で暮らしている。そして、時々わからなくなる。自分は韓国人なのか、日本人なのか。

今年の夏、マレーシアのとある島でシュノーケリングをした。サメ、亀、そして種々の魚と出会った。刺激的で幻想的な体験だった。そして、これを通じて気付いたことがある。

サメ、亀、小さな魚——種類も形も違う。性格もそれぞれ違う。

逃げるものもいれば、近づいてくるものもいる。でもみんな自由に、海を共有している。

かつて海にいた僕たちは、陸に足をつけ、見えない線を引き始めた。その過程にいたのが、日本と韓国だ。

学生時代、僕は歴史の授業で特に、韓国に関する話は真剣に聞いていた。意識的に取り組んでいたわけではない。体が勝手に反応していた。日本と韓国にはどうやら「国境線」があるらしい。教科書上で赤く強調されくっきりとしたその線は、ここから先は別の世界だと語りかけてくる。

日本の友人からは「日本人っぽくない」と言われることがある。韓国の友人からは「韓国人ではないな」と言われる。きっとみんなの中では、日本人はこうである、韓国人はそうであると、何か明確なイメージがあるのだろう。

僕はそのどちらでもないような気がする。

韓国人と話すと、日本人のような気がする。日本人と話すと、韓国人のような気がする。国籍が入れ替わる。言語が交差する。どこにいるのかわからなくなる。

気づけば、僕は「国境線」になっていた。

ドボン。バッシューン。

島の海にもう一度潜ってみる。すると、多種多様な魚が自由に泳いでいる。性格も、肌の色も、身長も、住む場所も異なるけれど、ただ海の中で息を吸っている。

海中にはどこにもくっきりとした赤い線は引かれていない。見えるのは、綺麗な夕日と果てしない地平線。

僕らは海から陸にやってきた。

僕は、魚だった。

みんなと一緒に泳いでいた。



## 最優秀賞

# “육십 년 고개”의 우정을 잘 부탁해

李昭始 [建国中学校]

안녕, 친구야!

나는 일본에서 태어나고 자란 열두 살 재일교포 소녀야. 가끔 내가 누구인지 헷갈리고 친구들과 달라서 그게 싫을 때도 있었어. 그런데 어느 날 집 근처 언니들이 “다음 생에는 한국인과 일본인 부모 밑에서 태어나고 싶다” 라고 말하는 걸 들었어. 그때 ‘어? 지금 내가 바로 그런 사람이잖아!’ 하고 속으로 엄청 기뻐서. 내 존재가 누군가의 꿈이라는 게 신기했어. 이렇게 된 건 우리가 60년 동안 쌓아온 우정 덕분이라고 생각해.

너와 내가 친구가 된 지 60년이 됐네. 환갑 축하해, 친구야! 예전에는 환갑이면 잔치를 크게 열었다는데, 요즘은 “환갑은 애들 잔치, 인생은 60부터” 라고 말한대. 나도 이렇게 긍정적으로 생각하는 게 참 좋아.

지금부터 내가 감동한 긍정의 말과 너를 알게 된 계기에 대해 쓸게. 너에게 본격적으로 친근감을 느낀 건 초등학교 3학년 때였어. 국어책에서 “삼 년 고개” 이야기를 배웠거든. 그 고개에서 할아버지가 넘어지고 “난 3년 안에 죽는다...” 하고 앓아누웠는데 푹푹이라는 아이가 “그럼 한 번 더 넘어지세요. 두 번이면 6년, 세 번이면 9년, 열 번이면 30년 더 살 수 있어요.” 라고 했어. 그 말을 듣고 한달음에 고개로 달려간 할아버지가 열 번 굴러서 “이제 100살까지 살 수 있다!” 하며 기뻐하는 장면이 잊히지 않아. 그때부터 푹푹이처럼 남을 웃게 하는 사람이 되고 싶었어.

더 놀라운 건 일본에도 비슷한 전설이 있는 거야. 교토의 산넨자카라는 언덕에서도 넘어지면 3년 안에 죽는다는 얘기가 있거든. 지금은 예쁜 계단길로 유명하지만 옛날에는 다들 조심조심 걸었다는 거야. 다른 나라에서 비슷한 이야기가 전해지는 게 참 신기하지 않아? 옛날 사람들도 물건뿐만 아니라 이야기도 함께 나뉘기 때문일 거야. 지금 우리가 만나서 대화할 때마다 새로운 이야기가 피어나는 것처럼 말이야.

돌아보면 우리도 싸운 적 있고 한동안 말 안 한 적도 있었지. 그래도 결국은 화해해서 다시 친구로 돌아왔잖아. 앞으로도 그런 날이 또 올 수도 있겠지만 그럴 때마다 내 손을 꼭 잡아줄래?

“삼 년 고개”의 푹푹이 계산대로라면 한 번 넘어질 때마다 3년이 늘어난다고 했어. 우리 우정은 벌써 60년을 함께 해왔으니 한 번 넘어질 때마다 3년이 아니라 60년이 늘어난다고 생각하자. 앞으로도 수없이 넘어지고 또 일어나면서 60년, 또 60년을 계속 함께하자.

“육십 년 고개”의 우정을 꿈꾸며

2025년 6월 22일

너의 친구가



# 優秀賞

## 한국 드라마

中谷 唯梨 [神奈川県立横浜国際高等学校]

한국 드라마를 보기 시작하면서 사랑에 대한 감정이 조금씩 변화하고 있다는 걸 느낀다.  
 복잡하고 섬세한 이야기들에 마음이 자연스럽게 끌려, ‘나도 사랑하고 싶다’ 라는 감정이 생긴다.  
 하지만 내가 동경하는 건 ‘서로 사랑하는 관계’ 가 아니라 ‘짝사랑’ 이다.  
 아프고 애절하며 대부분은 이루어지지 않아도, 그 일편단심의 아름다움에 끌린다.  
 밤이 되면 그런 감정은 더 강해진다.  
 텔레비전의 화면 너머엔 다정하고 배려 깊은 이상적인 주인공이 있다.  
 한국 드라마 속 남성들은 놀라울 정도로 신사적이고 섬세하다.  
 힘든 순간, 말없이 곁을 지켜주는 모습에서 따뜻한 위로를 받기도 한다.  
 그가 나를 바라보는 상상만으로도 가슴이 뛰다.  
 하지만 그 환상 속에서도 나는 손을 뻗지 않는다.  
 곁에 있을 수 있다는 사실만으로도 충분하다고 느낀다.  
 어찌면 나는 현실이 아닌, 드라마 속 세계를 동경하고 있을지도 모른다.  
 완벽한 주인공에게 마음을 주는 건, 내 감수성과 이상과 마주하고 싶어서일지도.  
 누군가에게 사랑받고 싶은 마음도 있지만,  
 이루어지지 않는 사랑 속에서 마음을 태우는 감정에 아름다움을 느낀다.  
 드라마는 사랑의 복잡함과 감정의 폭을 알려준다.  
 사람은 그 모든 것을 겪으며 조금씩 사랑에 가까워지는지도 모르겠다.  
 또 하나, 마음속 깊은 작은 바람.  
 어른이 되어서도 소중한 사람들과 함께 웃고 고민하며 일에 몰두하고 싶다.  
 마치 사랑처럼, 가슴 뛰는 순간은 직장이나 팀 안에도 분명 존재할 것이다.  
 그런 일상의 반짝임은 드라마 속 인물들이 그려내는 삶의 빛과 닮아 있다.  
 설령 그것이 아픈 ‘짝사랑’ 이라 할지라도  
 그 안에는 무엇과도 비교할 수 없는 빛이 있다.  
 그런 감정을 품고 현실에서도 빛나는 날들을 만들어갈 수 있다면,  
 이렇게 살아가는 지금의 나를 조금은 자랑스럽게 느낀다.  
 그리고 그 빛의 반대편엔 마음 깊은 곳에서 조용히 불어오는 외로움이 있었다.  
 “사랑이 깊으면 외로움도 깊다.”  
 사랑이 깊을수록 함께 자라나는 그림자.  
 그럼에도 불구하고도 내가 이 감정을 품은 이유는  
 외로움마저도 내가 동경하는 사랑의 일부이기 때문이다.



## 優秀賞

# ‘원 플러스 원’ 으로 빛나는 미래

杉田 和奏 [湘南白百合学園高等学校]

처음 간 한국 여행. 나는 편의점에 들러 요구르트 하나를 집어 들고 계산대로 향했다. 그러자 점원은 “같은 상품 하나 더 가지고 오세요” 라고 말했다. 갑작스러운 상황에 당황하고 있자, 점원은 내가 일본인이라는 걸 눈치챘는지 “+1 입니다” 라고 일본어로 친절하게 설명해 주었다. 내가 한국어로 뭐라도 말해 보려 하자 “한국어 공부하세요?” 라며 미소 지어 준 모습이 지금도 인상 깊게 남아 있다.

어떻게 하면 좋을지 몰라 하던 나에게 점원이 건네준 따뜻한 한 마디에, 처음 본 것임에도 불구하고 마치 오래 알고 지내던 사이처럼 마음이 가까워진 순간이었다.

한국의 ‘원 플러스 원’ 과 ‘덤’ 문화는 이후의 여행에서 편의점 뿐만 아니라 시장, 작은 분식집 등 곳곳에서 찾아볼 수 있었다. 나는 이 문화가 단순한 판매 방식이 아니라, ‘함께 나누는 기쁨’ 을 전제로 한 문화라고 생각한다. 딸 같아서 하나 더. 이것도 맛 보라며 하나 더. 그렇게 조금 더, 한 줌 더 내어주는 그 마음속에서 느낄 수 있는 ‘함께 사는 세상’ 의 온도는 여행자였던 나에게 깊은 인상을 남겼다.

그때 받았던 작지만 따뜻한 배려들은 시간이 지난 지금도 종종 떠오르는 기억들로 남아 있다. 별거 아닐 수 있는 요구르트 하나는 낯선 점원과 나 사이의 거리를 좁혀주었고, 따뜻한 한 마디의 말과 미소 한 번에 마음과 마음이 한 뼘 더 가까워질 수 있다는 걸 느끼게 해 주었다.

한일 국교 정상화 60 주년을 맞이한 지금, 문득 이러한 한국의 ‘하나 더’ 의 마음이 떠오른다. 개인과 개인 사이에서 마음을 잇는 그 작은 더함이, 어쩌면 국가와 국가 사이에서도 새로운 길을 여는 시작이 될 수 있지 않을까.

그 시작은 문화를 이해하고, 서로의 차이를 인정하며, 작지만 꾸준히 ‘하나 더’ 를 전하려는 사람들로부터 비롯된다고 생각한다. 편의점에서의 작은 만남은 내게 그러한 ‘첫 번째 +1’ 을 알려준 소중한 순간이었다. 나는 그 마음을 잊지 않고, 앞으로도 내가 쌓아갈 수 있는 ‘하나 더’ 에 대해 생각하며, 따뜻한 한일 관계를 만드는 데 보탬이 되고 싶다.



# 佳作

## 최애의 목소리를, 내 귀로.

山田 理琴 [大阪学芸高等学校]

한국어를 공부한다고 하면 “K-POP 좋아해?” 라는 질문을 자주 듣습니다.  
 맞아요. 사실 저도 BTS 를 계기로 한국어에 관심을 갖게 되었습니다.  
 제가 처음으로 푹 빠지게 된 건 중학교 1학년 여름이었어요.  
 2020년, 전 세계적으로 큰 인기를 끌었던 「Dynamite」 를 처음 들은 순간이었습니다.  
 그전에도 친구 덕분에 BTS 라는 이름은 알고 있었지만, 뮤직비디오를 제대로 본 건 그때가 처음이었습니다.  
 영상 속에서 춤추는 그들의 모습은 정말 충격적이었고, 눈을 땔 수가 없었습니다.  
 그때부터는 멈출 수 없었어요.  
 데뷔 때부터의 MV 를 전부 찾아보고, 예능, 다큐멘터리, 무대 영상 등도 한꺼번에 보면서 어느새 제 일상 속에 BTS 가 확고히 자리 잡게 되었어요.  
 자고 일어나도 BTS 생각뿐이고, 저도 모르게 점점 더 깊이 빠져들었어요.  
 그러던 어느 날, VLIVE 에서 생중계된 BTS 방송을 보게 되었어요.  
 그런데 자막이 없어서 내용을 거의 이해할 수 없었던 거예요.  
 말은 들리는데 무슨 뜻인지 알 수 없던 그 순간, 처음으로 “내 힘으로 최애의 말을 이해하고 싶다” 는 마음이 강하게 들었습니다.  
 그 계기로 저는 한국어 공부를 시작하게 되었습니다.  
 처음에는 너무 어려웠어요. 한글 읽는 법도 모르고, 글자 모양조차 기억이 잘 나지 않았어요.  
 그런데 이상하게도 포기하고 싶다는 생각은 한 번도 들지 않았어요.  
 오히려 공부가 재미있기만 했어요. 한국인 유튜버의 말투를 따라 하기도 하고, 단어장을 만들어 외우기도 하면서, 누구의 강요도 없이 자연스럽게 매일 책상 앞에 앉아 있는 저를 발견했어요.  
 조금씩 들리는 말이 많아지는 게 기뻛고, 자막 없이 어느 정도 내용이 이해됐을 때는 정말 감동적이었어요.  
 ‘한국어를 일본어로 번역하는’ 것이 아니라 ‘한국어 자체로 이해할 수 있게 된’ 순간에는, 제 안에서 새로운 감각이 생긴 듯한 느낌이 들었습니다.  
 그 뒤로는 독학으로 TOPIK 3 급에도 합격하고, 점점 자신감이 생기기 시작했어요.  
 무엇보다도 기뻛던 건, 공부가 고통이 아니라 ‘더 알고 싶다’ 는 마음으로 자연스럽게 이어졌다는 점이에요.  
 억지로 하던 영어 공부와는 완전히 달랐고, 이렇게까지 긍정적인 에너지로 노력할 수 있다는 사실에 저 스스로도 놀랐어요.  
 BTS 를 계기로 시작된 한국어 공부는 이제 한국의 문화, 역사, 사회 전반으로까지 관심이 확장되고 있어요.  
 앞으로는 한국에 유학해서 이 나라를 더 깊이 알고 싶어요. 그런 새로운 꿈도 생겼답니다.  
 그 여름, “최애의 말을 알고 싶다” 는 마음이 제 일상을 바꿔놓았습니다.  
 한국어는 저에게 단순한 언어가 아니라, ‘좋아한다’ 는 감정에서 시작된, 인생에서 처음으로 진심으로 노력하게 해 준 존재입니다.  
 고마워요, BTS.  
 당신들의 목소리가 제게 배움의 의미와 꿈을 선물해 줬어요.



## 佳作

# 한국 드라마를 통한 나의 성장이야기

矢島 美優 [宮城県泉高等学校]

저는 한국 드라마를 아주 좋아합니다. 처음 보게 된 계기는 초등학교 5학년 때 어머니가 보시던 드라마를 옆에서 함께 본 것이었습니다. 처음에는 단순히 화면만 바라보고 있었는데, 어느 순간 등장인물의 감정과 이야기에 빠져들어 다음 이야기가 기다려지게 되었습니다.

한국 드라마에는 친구들과 서로를 도와가며 어려움을 극복해 나가는 내용이 많이 담겨 있습니다. 주인공들이 서로를 격려하고 협력하며 앞으로 나아가는 모습을 보면서, 저도 제 주변 사람들과의 관계를 의식하게 되었습니다. 테니스부 활동을 하면서, 그 전까지는 시합에서 제 플레이에만 집중했지만, 이제는 동료를 배려하는 것이 얼마나 중요한지 깨닫게 되었습니다. 파트너가 실수를 하고 의기소침해 있을 때는 “괜찮아, 다음에는 잘 될 거야!” 라고 말하며, 서로를 격려했습니다. 예를 들어 테니스를 할 때는 배드민턴을 주제로 한 드라마 「라켓소년단」의 경기 장면을 떠올리며 플레이하기도 했습니다. 그렇게 하다 보니 자연스럽게 동료를 믿고 협력하려는 마음이 강해졌고, 경기 중의 분위기도 좋아졌습니다. 결국 마지막 대회에서는 단체전에서 우승할 수 있었습니다. 동료들과 마음이 하나되어 이룬 승리는 그동안의 어떤 승리보다도 기뻛고, 한국 드라마를 통해 배운 것이 제 힘이 된 순간이었습니다.

또한 한국 드라마를 계기로 한국어 공부에도 본격적으로 몰입하게 되었습니다. 사실 그 이전에도 조금은 배우고 있었지만, 열심히 하지는 않았습니다. 그러나 드라마 속 대사를 직접 이해하고 싶다는 마음에 “더 열심히 한국어를 배우고 싶다!” 라는 생각이 강해졌습니다. 뜻을 찾아 외운 단어나 표현을 다음 회차에서 들었을 때의 성취감은 정말 컸고, 그런 경험이 쌓이면서 한국어 실력이 크게 향상되었습니다. 지금은 자막이 없어도 어느 정도 내용을 이해할 수 있게 되었습니다.

저에게 한국 드라마는 저를 성장시켜 주는 소중한 존재입니다. 동료와의 관계를 돌아보게 해 주었고, 노력의 중요성도 가르쳐 주었습니다. 그리고 그로 인해 넓어진 한국어 학습은 저에게 새로운 세계로 향하는 문을 열어 주었고 한국 문화에 대해 더욱 관심을 갖게 되었습니다. 앞으로도 한국문화를 통해 배움과 발견을 이어가며, 제 가능성을 더욱 넓혀 나가고 싶습니다.



# 佳作

## 한국요리

佐藤 幸 [Maple Leaf Kingsley International School]

시간이 흘러 제가 처음 김밥을 만난 것은 초등학교 때, 가족과 함께 한국을 여행했을 때였습니다. 서울의 거리를 가족들과 너그럽게 걸다가 작은 노점에 시선이 멈췄습니다. 그곳에서는 주름진 할머니가 한 손 한 손 정성껏, 마치 장인이 공예품을 만드는 듯 섬세하면서도 능숙하게 김밥을 말고 계셨습니다. 테이블 위에는 알록달록한 김밥들이 놓여 있었고, 계란, 야채, 소고기, 참치 등 다양한 재료에 어린 저는 그저 마음을 빼앗겼습니다.

하지만 그때의 저는 소심해서, 길거리 음식을 먹어도 괜찮을까 걱정하며 결국 먹을 용기가 나지 않았습니다. 먹지 못한 것을 후회하면서도 그 장면은 마음에 깊이 남아, 김밥은 곧 제 마음 한편에 '동경의 음식' 이라는 이미지가 오래도록 이어졌습니다.

그리고 몇 년 후, 제가 현재 거주 중인 말레이시아에서 한국인 친구 집에 놀러 갔을 때, 놀랍게도 '김밥 만들기 파티' 가 기다리고 있었습니다. 친구 7명 정도와 함께 즐겁게 재료를 취향껏 나누고, 참기름 향에 둘러싸여 김밥을 만들기 시작하니, 자연스럽게 서울 노점에서의 기억이 아련히 떠올랐습니다.

직접 해보니, 김밥 만들기는 상상 이상으로 자유롭고 즐거웠습니다. 알록달록한 재료를 마음껏 넣다 보니 저는 욕심을 부려 친구들보다 두 배나 큰 김밥을 만들게 되었습니다. 말고 난 순간 모두가 크게 웃었고, 그 거대한 김밥을 억지로 입에 우겨 넣고 우물우물 먹으며 눈물 날 정도로 웃었던 기억은 아직도 있을 수 없습니다.

어린 시절 멀리서 바라만 보던 김밥. 그 꿈은 친구들과 함께 만들고 먹음으로써 비로소 이루어졌습니다. 맛뿐만 아니라, 그 안에는 국경을 넘어선 우정과 따뜻함이 담겨 있었습니다. 요리는 사람과 사람을 이어주는 마법이라는 것을 이 경험을 통해 강하게 느꼈습니다.

만약 그때의 제가 용기를 내어 길거리 김밥을 먹었다면 분명 맛있었을 것입니다. 하지만 먹지 않았기에, 몇 년 후 친구들과 함께 웃으며 만든 김밥이 더 각별하고 비로소 제 마음을 채워주는 추억이 된 것 같습니다.

일본인으로서의 저에게 김밥은 한국 요리의 매력뿐만 아니라, 한일 교류의 상징이기도 합니다. 그 한 줄의 김밥 안에는 맛뿐만 아니라 웃음소리, 우정, 그리고 국경을 넘어서는 힘이 가득 담겨 있습니다. 김밥은 저에게 대한민국이라는 나라를 깊이 정의할 수 있게 되었습니다.



## 佳作

# 내가 생각하는 한일 교류

関口 遙 [松戸国際高等学校]

“어른이 된다는 것은 누군가의 꿈이 되는 것이다.” 그것이 직업이 되는 것을 나는 한국 드라마 ‘스타트업 꿈의 문’ 을 보고 처음으로 의식했다. 주인공 달미의 할머니가 달미가 어릴 때 했던 말이다. 부모가 이혼한 달미는 형편이 어려워 대학 진학을 포기했다. 그럴 때, 그녀를 밀어 주는 인물과 만나, 창업을 목표로 하는 이야기이다. 인간은 주변 사람들의 도움이 있기 때문에 살아갈 수 있다. 열심히 하면 무엇이든 할 수 있다는 것은 환상이고, 경제적인 문제를 학생이 스스로 해결할 수 있는 것도 어려운 일이다. 학력 사회, 격차사회에서 진학하지 못하는 것은 꿈을 밀어주기 이전의 문제로 꿈을 꾸는 것조차 허용되는 않는다.

학력사회인 것은 한국이나 일본이나 마찬가지. 격차사회인 것도 마찬가지. 그렇다면 함께 손을 잡고 극복하는 방법을 생각하는 것이 좋을지도 모른다. 이웃이니까. 한국과 일본은 역사적으로 많은 문제를 안고 있지만 은이들의 문화교류는 활발하다. 나도 트와이스를 계기로 한국에 대한 동경을 갖게 된 사람 중 하나이다. 그 덕분에 한국어로 말할 수 있게 되었다. 하지만 한국에는 아직 가본 적이 없기 때문에 빨리 한국에 가서 한국의 모든 것을 알고 싶다. 이것이 지금 나의 꿈이다. 다만 이런 꿈을 꿀 수 있는 것은 가족이라는 버팀목이 있기 때문이라는 것을 깨달았다. 수험공부를 할 수 있는 것도, 머지않아 한국 여행이나 유학을 갈 것이라고 생각되는 것도 경제적 뒷받침이 있기 때문이다. 사실 내 친구는 대학 진학에 대해 경제적으로 제한이 있다. 그걸 보고, 알고 있는 나는 생각한다. 어떻게 하면 누구나 꿈을 가질 수 있는 사회가 될 것인가.

최근 한일청년 파트너십’이라는 행사가 일본에서 개최되고 있는데, 그곳에서는 일본과 한국의 대학생, 대학원생들의 한일문제에 대해 토론하고 있다. 서로의 가치관 차이를 인식하고 상호간의 이치를 심화하는 것이 목적이다. 주제 안에는 교육제도가 있어서 한일간의 학교생활과 교육문제를 다시 살펴볼 수 있다. 이러한 것이, 내가 생각하는 한일교류의 이상형이다. 이곳에서의 만남을 바탕으로 서로의 꿈을 이어줄 수 있는 관계를 만들고 싶다. 한국에서는 젊은이의 창업을 서포트하는 프로그램이나, 정부에 의한 자금원조의 구조가 잘 마련되어 있다. 일본에서도 지자체나 대학이 중심이 되어 창업지원 이벤트 및 교육이 확산되고 있다. 그곳에서 양국의 대학이나 연구기관이 제휴해, 학생이나 젊은 기업가의 육성을 목표로 하는 대처를 하는 것이, 새로운 사회를 만들어 가는 우리의 사명인지도 모른다.

나는 미래에 한국어를 사용하는 직업을 갖고 싶다. 도라마처럼 잘 할 수 있을지는 모르겠지만 사회의 어려움에 맞서는 사람들을 일본과 한국의 울타리를 넘어 지원할 수 있도록 나 자신이 한일 현대사회를 배우려 한다.



## 最優秀賞

### 「모국어가 아니었지만 진심이었어 .」 우리가 땀을 흘린 그날 밤 - 세상 멀리 있는 “ 여동생들” 에게 -

水山 葵 [中央大学]

「언니~!」

찜질방의 뜨거운 공기 속에서 한국어로 그렇게 불러준 여동생들이 있었다. 그 단 세 글자의 울림에 가슴속도 뜨거워졌다.

우리는 다른 나라에서 온 외국인이었지만 누구의 모국어도 아닌 한국어라는 언어로 연결되었다.

처음에는 서툴고 더듬거렸지만 부족한 말의 틈새에는 서로의 마음이 가득 담겨 있었다.

「요즘 진짜 힘들어. 내 미래는 괜찮을까...」 어느 한 여동생이 말했다.

나도 똑같이 불안했지만 「괜찮아. 너라면 분명 잘할 수 있을 거야」 라고 언니로서 그저 힘이 되어주고 싶었다. 그런 진심을 모국어  
가 아니었지만 마음에서 우러나온 말로 주고받았던 뜨거운 밤은 평생 계속되었으면 하고 바랐던 밤이었다.

찜질방의 따뜻한 돌 위에 앉아 서로의 이야기를 듣고 말없이 흘러내리는 땀방울마저도 우리의 유대를 더 깊게 만들어 주었다. 그 순  
간만큼은 마음 한 켠의 불안도 모두 사라진 듯했다.

여동생들이 내게 ‘언니’ 라고 불러줄 때마다 나는 혼자가 아닌 ‘우리’ 가 되었다.

우리는 서로에게 힘이 되어주었고 그 뜨거운 공기는 우리의 마음까지 데워주었다.

은은하게 풍기는 약초 향 속에서 땀을 타고 흐르는 땀이 마음속의 뉘숯함까지 함께 씻어내려주는 것 같았다. 그리고 나는 그순간  
이렇게 실감했다.

「찜질방에서는 시간이 천천히 흐른다」 고.

찜질방의 열기는 때로는 숨이 막힐 정도였다. 하지만 땀은 혼자서 흘리는 괴로운 땀이 아니었고

마음을 나눈 순간을 간직하게 해주는 온기였다. 그 땀은 스며들어 마음의 땅에 조용한 힘이 되어 우리를 이어주었다.

인생도 찜질방의 공기처럼 뜨겁고 숨 막힐 때가 있다. 하지만 함께 땀을 흘렸던 기억과 마음이 이어져 있다면 어떤 뜨거움도 견딜 수  
있다. 그 뜨거움은 함께 나누는 순간 마음을 데우는 따뜻한 온기로 바뀌어 간다. 그리고 반드시 찾아오는 차가운 냉탕 같은 휴식이  
또다시 한 걸음을 내디딜 용기를 준다.

그로부터 1년. 여동생들은 지금 각자의 장소에서 각자의 땀을 흘리고 있을 것이다. 나도 여동생들과 함께했던 그 밤을 떠올리며 나  
만의 땀을 흘리고 있다. 앞으로도 힘들 때마다 그 순간을 떠올리며 우리는 서로를 응원할 것이다. 세상이 아무리 멀어도 우리 마음  
은 언제나 함께일 거라고 믿는다.

흘린 땀만큼 인생은 분명 가벼워지리라. 또 언젠가 그 뜨겁고 시간이 천천히 흐르는 찜질방에서 마음을 터놓고 이야기할 수 있는 날  
이 오기를 바란다.

그리고 이것만은 잊지 말아 줘.

나는 지금도 너희들만의 언니야.



## 優秀賞

# 나의 보물 1 호 [ 한국어 사전 ]

森元 富美子 [千葉県]

여행 가방을 앞에 두고 나는 잠깐 고민하고 있었다. 무겁고 부피도 큰 이 종이 사전을 넣어야 할까 말까... 나는 한국에서 공부하기 위해서 신나게 떠날 준비 중이었다. 3주 과정을 포함해서 한 달 동안 한국에 있을 예정이다. 여러 물건으로 가득찬 가방은 틈이 없는 데다가 노트북조차 무거운데 이 사전을 굳이 가져가야 하나? 들고 다니기도 힘든데... 그래도 안 되겠다. 이제 8년째가 된 내 단짝이다. 두고 가면 빠질 거라 그럴 수는 없지. 그리고 내 손때가 묻은 이 사전이 유학 중의 내 불안함을 없애줄 것 같았다. 나의 단짝 사전은 내가 50살이 되었을 때 우리 아이들이 사 준 것이다. 원래 50살을 맞이하면 기념이 될 만한 것으로 새 사전을 살 생각이었다. 그때까지 쓰던 것은 작고 찾아보기에는 좀 부족한 부분이 많아 불편했다. 어떤 것이 좋을지 생각을 하다가 한국어 선생님께 여쭙었다. 선생님께서는 예문이 많이 실려 있는 사전이 좋다고 추천해 주셨다.

그러던 어느 날 우리 첫째 딸이 나에게 물었다.

“ 엄마, 얼마 후면 생일인데 갖고 싶은 거 있어? ”

“ 어... 마침 잘됐다. 갖고 싶은 거 있는데 ”

“ 그게 뭐데? ”

“ 종이 사전, 사 줄래? ”

“ 당연히 좋지. 근데 우리 셋이서 사는 거라 좀 더 비싼 것도 괜찮은데 ”

“ 지금 이게 갖고 싶은 거야. 필요하기도 하고. 실은 사고 싶은 게 있거든 ”

“ 그래 잘됐네. 다음에 같이 서점에 가자 ”

“ 고마워, 기대가 되네 ”

며칠 후 나에게 새로운 종이 사전이 왔다. 하얗고 냄새도 좋아서 설 다. 더 의미 있는 사전으로 만들고 싶어서 아이들에게 사인 해 달라고 했다. 아이들이 맨 마지막 페이지에다 메시지도 남겨 주었다. 처음에는 공주님처럼 소중히 다루었다. 더러워지는 게 싫어서 사전을 펴기 전에 반드시 손을 씻었다. 하지만 드레스 같은 투명 커버는 점점 찢어지고 손때도 묻었다. 더러워진 것을 보니까 그게 사전의 본래 모습이라고 느꼈다. 이제는 공부할수록 손때가 묻어서 좋다. 단어를 찾을 때마다 작은 표시를 하기도 한다. 사전을 찾다가 그 표시들을 발견하면 너무 반갑다. 그렇지만 위외지 못한 단어를 보면 오히려 실망할 때도 있다. 한 2000 페이지 되는 사전인데 언제 다 표시가 되어 손때가 묻을까? 펴 보지 못하는 페이지가 더 많을 텐데.

한국에 있는 동안 학교에도 도서관에도 카페에도 사전을 가져 갔다. 심지어 학생 식당에 갈 때도 손에서 놓지 않았으니까 찌개 냄새도 맡았을 것이다. 내가 무거운 가방을 들고 다니니까 담임 선생님께서는 항상 준비가 잘 돼 있는 학생이라고 칭찬해 주셨다. 이 사전이 있었기 때문에 평소처럼 공부에 집중할 수 있었고 3주간의 유학도 잘 마무리할 수 있었다. 앞으로도 곁에 두고 한국어 공부를 하면서 멋있는 사전으로 만들어 갈 것이다. 지금도 많은 단어들 “나 좀 봐 줘 ” 라고 나에게 속삭이는 것 같다. 그러다가 환갑을 맞이할 때 아이들에게 다시 사인해 달라고 할 생각이다. 예전에 사인한 것도 이미 잊어버린 아이들이 과연 어떤 표정을 지을지 벌써부터 기대가 된다.



## 優秀賞

# 우리 슬기로운 '덕질' 생활

田村 香織 [大阪府]

초등학교 4학년인 아들이 엄마가 좋아하는 한국에 대해 알려 달라고 했다. 계기는 나의 7년 만의 한국 여행이었다. 겨우 이틀 동안 떨어져 있었을 뿐인데, 아들은 너무 서운했다며 날 껴안았다. 그리고 “엄마가 없는 동안 생각했는데”라며 자신도 엄마의 ‘덕질’을 응원하면 더 즐겁게 계속 함께할 수 있을 것 같다고 했다.

나는 한국에 매력을 느낀다. 예전에는 마음만 먹으면 바로 서울에 갈 수 있었지만, 나를 둘러싼 상황이 변화하면서 7년 전부터 주 1회 한국어 교실과 드라마, 영화로만 만날 수 있는 먼 나라가 되어 버렸다.

그래도 한국은 20년 이상 변함없이 사랑하는 대상이다. 지금 내 덕질은 매일 밤의 한국 드라마와 주말의 한국 영화다. 혼자 하는 덕질의 편안함에 익숙해져 버렸지만, 굉장히 좋은 작품을 만나면 감상을 뜨겁게 나눌 ‘덕질 친구’를 갖고 싶다고 생각할 때가 있다. 그래서 아들이 그런 ‘덕질 친구’가 되어 준다면 굉장히 기쁠 것 같다고 전부터 은근히 바랐기에 아들의 말은 너무나 반가웠다. 그야말로 천재일우의 기회!

그날 밤, 나는 아들이 좋아할 만한 한국의 매력을 잠도 안 자고 생각했다.

‘역사? 문화? K-POP? 아이돌? 아니, 역시 드라마가 좋겠어!’

‘어떤 드라마가 좋을까?’

‘실패하면 안 돼.’

‘정말 좋아하는 드라마는 수없이 많지만……’

‘아들이 역사에 관심이 많아서 우선 사극으로 하자.’

‘아직 열 살이니까 연애나 폭력 요소는 적고, …… 역시 해피엔딩이 좋겠다!’

‘그리고 역사 외의 요소도 있는 작품……’

‘그래, <대장금> 이야!’

그렇게 주말마다 20여 년 만에 드라마 <대장금>을 함께 보기 시작했다. 어린 ‘장금이’가 여러 번 물을 나르는 장면에서는 정답을 함께 고민하며 요리 대결에서 이기겠다고 우렁차게 소리를 지르고, ‘한 상궁’이 세상을 떠났을 때는 눈물을 푹푹 흘리면서 아들이 장금리와 함께 일희일비하는 솔직한 모습에 신선한 감동을 느꼈다.

이리하여 나에게 ‘덕질 친구’가 생겼다.

그로부터 1년이 지났다. 나의 덕질은 우리의 덕질이 되었다. 아들은 특히 한국 사극과 스포츠 영화를 좋아하게 된 것 같다. 드라마나 영화를 다 보고 난 뒤에 재미있었던 점에 대해 꽃을 피우는 것이 정말 행복하다. 20년 전에는 상상도 하지 못했던 행복이다. 사랑하는 한국의 영상 작품들이 이야기를 나누고 뜨거운 마음을 공유함으로써 오랫동안 기억에 깊이 남는 작품들이 될 것임을 알게 되었다.

“고마워! 나의 최고의 덕질 친구야.”



## 佳作

# 제주도 감귤이 전해준 따뜻한 마음

蓮見 琳 [新潟大学]

겨울이 오면 나는 제주도의 감귤이 자연스럽게 떠오른다. 나에게 감귤은 단순한 겨울 과일이 아니고, 한 편의 추억이자, 사람의 정과 삶의 온기를 가르쳐 준 작은 교훈의 열매이다.

삼 년 전 겨울, 나는 가족과 함께 제주도로 여행을 가서, 감귤 따기 체험에 참여했다. 제주도의 감귤밭은 햇살을 받아 주황색으로 물들어 있었고, 그 풍경은 마치 한 폭의 그림처럼 평화로웠다. 차가운 겨울바람이 불어왔지만, 농장 입구에서 우리를 맞아준 할머니의 미소는 그 어떤 난로보다도 따뜻했다.

할머니는 감귤 따는 법을 친절히 알려주셨다. 손으로 무리하게 당기면 나무가 다치니, 꼭지 부분을 조심스럽게 잘라야 한다고 하셨다. “나무도 아프거든요.” 그 말씀이 마음에 오래 남았다. 감귤은 단순히 열매가 아니라, 돌봄과 애정이 깃든 존재라는 걸 느꼈다. 통역사는 “사랑을 담아 따면 감귤이 더 달아진다” 고 말해줬고, 나는 감귤 하나에도 사람의 진심이 스며들 수 있다는 사실에 감동했다.

우리는 할머니와 나란히 앉아 이런저런 이야기를 나눴다. 더운 여름과 추운 겨울을 견디고, 때론 태풍이나 가뭄으로 힘들기도 하지만, 계절마다 나무에 열매가 열리는 모습을 보면 피로가 다 잊힌다고 하셨다. 그 말씀에서 나는 인생의 무게와 기쁨을 동시에 느꼈다. 소박한 말 한마디와 따뜻한 미소가 마음 깊숙이 스며들었다.

그날 수확한 감귤은 호텔로 돌아와 가족과 함께 먹었다. 달콤한 향과 맛이 입안에 퍼지며, 낮에 경험했던 감귤밭의 풍경과 할머니의 목소리가 자연스럽게 떠올랐다. 그 감귤은 단순한 과일이 아니라, 사람과 자연, 그리고 정이 어우러진 따뜻한 기억이었다. 감귤 하나가 나의 마음을 따뜻하게 데워주었고, 그 기억은 나를 조금 더 성숙하게 만들어주었다.

일본에도 겨울이면 귤을 먹으며 따뜻한 이불 속에서 보내는 문화가 있다. 하지만 제주도에서의 감귤 따기 체험 이후로, 나는 귤을 볼 때마다 그날의 감정을 떠올리곤 한다. 나도 언젠가는 감귤처럼 소박하지만, 누군가의 마음을 따뜻하게 해 줄 수 있는 사람이 되고 싶다고 생각한다. 그리고 특별하지 않아도 조용히 다가가 마음을 어루만질 수 있다면, 그것만으로도 삶의 의미는 충분하다고 느낀다.

감귤이 내게 가르쳐 준 건, 진심은 항상 조용하고 작은 순간 속에 깃들어 있다는 사실이다. 나는 앞으로도 그 마음을 잊지 않고, 누군가의 마음을 따뜻하게 감싸주는 사람이 되고 싶다.

사람 사이의 온기를 전하는 감귤처럼….



# 佳作 효도

田原 彰人 (埼玉県)

우리 부부는 한일부부 12 번째다.

한국인인 아내는 아들에게 계속 한국어로 말한다. 아기 때부터 초등학교 4 학년이 된 현재까지 줄곧.

나와 아내가 처음 만난 때는 딱 20 년 전, 내가 한국에 유학하던 시절이었다.

당시 대학교 1 학년이었던 그녀는 일본 유학을 목표로 삼고 있었다. 어렸을 때부터 일본 애니메이션과 음악을 좋아해서 중학생 때부터 일본어 공부를 시작했다고 한다. 하지만 한 번도 일본에 가본 적도 없었고 일본인 친구도 없었다. 일본에 대한 호기심과 동경으로 가득했고 꼭 일본에 유학하겠다고 눈을 반짝이며 말하곤 했다.

한편으로, 한 가지 큰 불안을 안고 있었다. 유학으로 1 년이나 일본에 가게 되면 엄마가 외로우실 거라고. 그리고 그녀는 눈물을 보이며 말했다.

“내가 엄마를 행복하게 해주고 싶어요”

하지만 그 수년 뒤, 그녀는 일본인인 나와 결혼하게 되는 바람에 1 년은커녕 계속 일본에서 살게 되어 버렸다.

그리고 아이가 태어나 그녀는 일본에서 ‘엄마’ 가 되었다. 사회 규칙을 가르치고 아프면 병원으로 데려다 주고 숙제를 봐주고... 나는 주로 아들의 노는 상대일 뿐이다. 내가 아내처럼 똑같이 말해도 아들은 말을 잘 안 듣는다. 그래서 곤란할 때마다 꺼내는 말이 “엄마한테 말할 거야”. 그 한마디에 아들은 순순히 따른다. 그만큼 우리 집에서는 ‘엄마’ 의 영향력이 최고다.

그런 아들도 이제 막 반항기가 시작되었다.

아기 때부터 엄마와는 한국어로만 말하던 아들도 초등학교 입학한 이후에는 점점 일본어로 말을 거는 일이 많아졌다. 그리고 엄마보다 우위에 서고 싶어지는 순간이면 기다렸다는 듯 이렇게 말한다.

“엄마는 한국사람이니까 잘 모르는 거야”

만약 한국이었으면, 아이가 한국에서 태어나 계속 한국에서 살았다면 그런 말을 듣는 일은 없었을 텐데...

매년 여름방학이 되면 아내와 아들은 한 달 동안 한국에 간다. 올해도 방학이 다가오자 아들은 설레는 마음으로 할머니와 한국어로 통화하곤 했다.

그리고 이제 방학이 되어 아들은 할머니와 함께 많은 추억을 쌓고 있다. 해바라기밭에도 가고, 바다에도 가고, 학원도 같이 다닌다.

지금 즐겁게 시간을 보내고 있는 할머니와 아들의 모습을 보면서 아내가 왜 그렇게 아들에게 한국어로 계속 말을 걸어 왔는지 깨달았다. 그것은 멀리 일본에 사는 딸이 할 수 있는 최선의 효도였던 것이다. 엄마가 되었어도 변하지 않은 아내의 마음. 그 마음을 떠올리며, 나는 아내를 더 행복하게 해주고 싶다고 새삼 다짐했다.



# 佳作

## 라면 한 봉지의 배려

山梨 彰子 [東京都]

“먹는 걸로 싸우지 마. 다시 사면 되잖아.”

이 말은 한국인 남편이 항상 아들들에게 하는 말이다. 주스를 놓고 싸울 때도, 잘라 놓은 수박의 크기를 두고 말다툼할 때도 마찬가지다. 남편이 자신을 위해 사 둔 과자가 어느새 없어져도 절대 화내지 않는다. 그게 아빠 것이라는 걸 알면서 아들이 먹어도, 내가 먹어도 ‘맛있게 먹었으면 다행이야.’라며 웃으면서 받아들인다.

일본에서 자란 나에게는 음식의 소유를 중시하는 감각이 있었다. 내가 좋아해서 사 온 푸딩을 누가 몰래 먹으면 화가 나 냉장고 안쪽에 숨긴 적도 있다, 나는 그게 당연한 줄 알았다. 하지만 남편처럼 자연스럽게 나누어 먹는 한국 문화를 접하면서 내 생각은 조금씩 달라지기 시작했다.

결혼 전에 작은어머니 댁에서 식사한 날이 아직도 기억난다. 나는 이미 저녁을 먹은 상태였다. 그런데 밤늦게 돌아온 남편의 사촌이 자신을 위해 라면을 한 봉지를 끓이더니, 아무렇지 않게 “같이 먹을까요?” 라고 말했다. 단 한 봉지였는데도 나누자고 한 그 말에 놀랐고, “나는 괜찮으니 조금이라도 같이 먹자.” 는 듯한 그의 태도에서 진심이 느껴져 마음이 몽클했다. 따뜻한 배려에 감동했고, 그 순간의 온기를 지금도 잊을 수가 없다. 그리고 결국 우리뿐만 아니라 다른 사촌들도 하나 둘 모여들었다. 모두 둘러앉아 한 그릇의 라면을 먹으며 웃고 이야기했다. 그 후에는 다 함께 아이스크림을 사러 편의점에 간 기억도 소중히 남아 있다. 작은 라면 한 봉지가 모두를 잇는 따뜻한 시간이 된 것이다.

한국에서는 함께 식사하고 나누는 문화가 깊이 자리 잡고 있다. 불낙전골이나 백숙처럼 한 냄비를 함께 둘러싸고 먹는 음식이 많은 것도 이 문화를 잘 보여 준다. 가족, 친구, 동료와 음식을 나누는 과정에서 마음도 함께 나누며 자연스럽게 따뜻한 인간관계가 형성된다.

나는 한국 사람들의 나누는 마음에서 많은 것을 배웠다. 화려한 말보다 라면 한 봉지를 나누는 그 행동 속에 상대를 생각하고 배려하는 진심이 담겨 있었다. 나라가 달라도 그런 마음이 사람과 사람을 하나로 이어 주고, 서로를 깊이 이해하게 만든다는 걸 실감했다.

앞으로도 나는 한국과 일본의 문화 차이를 즐기며 서로를 인정하고 응원할 수 있는 관계를 이어 가고 싶다. 그리고 내 아들들에게도 작은 나눔이 마음을 잇고 사람을 이해하게 해 준다는 것을 전해 주고 싶다.



## 佳作

# 다시 맛보고 싶은 미역국의 기억

田中 菜乃 [帝塚山学院大学]

“생신 때 미역국 한 그릇이라도 끓여드릴 걸…….”

신경숙의 『엄마를 부탁해』에서도 엄마의 생일조차 제대로 챙기지 못했던 자식들이 홀연히 사라진 엄마를 찾으며 자신들의 무심함을 되새긴다.

“엄마 생일에 미역국 한 번 끓여준 적 없는 것 같아. 정작 미역국을 차려주던 사람은 언제나 엄마였으니까.”

소설 속의 엄마처럼 우리 할머니도 그랬다.

할머니는 늘 따뜻한 국을 끓여 주셨다. 무슨 국이었는데는 잘 기억나지 않지만 한 손갈에 담긴 온기만큼은 생생히 남아 있다. 그러다가 할머니가 요양원에 들어가시면서 그 국들을 두 번 다시 맛볼 수 없게 됐다.

“저기…, 한국으로 유학 가고 싶은데요…….”

부모님께 이렇게 상담한 18 살의 나는 그때 아버지가 재일교포라는 사실을 알게 되었다. 아버지는 혹시나 사람들이 색안경을 끼고 볼까 봐 비밀로 했다고 하셨다. 나는 오히려 기뻐지만 한편 많은 후회도 했다. 조부모님과 아버지가 어떻게 살아오셨는지 여쭙고 싶어도 불가능하기 때문이다. 맛있는 국을 받아 먹으면서도 진솔한 대화를 나눴던 적이 없는 후회는 나의 유학을 더 부추겼다.

자신의 삶의 무게에 고군분투하던 유학 시절, 나에게 할머니의 부고 소식이 들려왔다. 할머니의 죽음은 처음 접하는 감정들로 뒤섞였고 식은 할머니의 손은 어릴 때 끓여주셨던 따뜻한 국 온도와 대조를 이뤄 더욱 슬펐다.

귀국을 하루 앞둔 날, 친구가 주문한 음식에 미역국이 딸려 왔다. 그걸 한 손갈 받아먹었더니 저절로 가슴이 미어져 온다. 내 생일 때마다 끓여주시던 할머니의 손맛이었기 때문이다. 한입 머금은 순간 눈물이 왈칵 쏟아졌다. 할머니의 고향 땅에서 나는 그렇게 처음으로 할머니를 느꼈다.

나 또한 『엄마를 부탁해』에 등장하는 딸처럼 미역국 한 그릇에 사랑을 깨달은 것이다. 뒤늦게 말이다. 엄마와 할머니의 따뜻한 사랑이 항상 곁에 있었기에 그 소중함을 모른 채 당연시했었다.

소설 속의 딸은 허공을 향해 소리친다.

“엄마, 지금 어디 있어요?”

나는 하늘을 향해 외친다.

“할머니가 끓여주신 미역국을 다시 한번 먹어 보고 싶어요.”

사랑해야 할 사람은 늘 가까이 있는데도 우리는 멀리 있는 존재에 마음을 빼앗기곤 한다. 그러다가 평범한 무언가가 지금 이 순간이 얼마나 소중한지를 일깨워준다.

그래서 나는 다짐한다.

누군가에게 내가 미역국을 끓여줄 수 있는 사람이 되리라고.

그 한 그릇에 내가 받은 사랑을 조용히 되돌려주겠다고.

후회하지 않기 위해 오늘부터 사랑하겠다고.



## 最優秀賞

藤本 かおり [京都府]

菜の花やトルハルバンと背比べ

## 優秀賞

栗生 將信 [神奈川県]

本箱に「玉篇」と言う宝あり

大宮 莉桜 [新潟大学]

ビビンバを混ぜて心もおだやかに



## 佳作

佐藤 泰成 [東京大学]

松餅を作りし祖母を迎ふ秋

吉原 百花 [法政大学国際高等学校]

別れ際 あんにょん一つ春の駅

西村 空 [北海商科大学]

冬遠し 静かに眠る キムチかな

朴 喜俊 [新田小学校]

春雨や キムチの壺を 洗う音



## 最優秀賞

大城 哉子〔沖繩県〕

백 년의 아픔 손잡고 나아가는 천년의 희망

## 優秀賞

福山 順子〔鹿児島県〕

이모, 한 병 더! 쌓여 가는 빈병이 흡사 볼링장

上山 良子〔東京都〕

군대 간 가수 기다리며 겪어본 고무신 체험



## 佳作

田中 渚紗 [新潟大学]

아침 침대 위 알람이 멈췄지만 1 분만 더! 더!

木野 萌香 [北海商科大学]

한국 드라마 공부라는 핑계로 정주행 시청

佐藤 智萌 [新潟大学]

과자는 매번 한 입만 먹자 하고 결국 한 봉지

渡辺 由美子 [東京都]

눈이 빠지게 세계가 기다려온 멋진 소년단





